
超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！

アオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！

【Nコード】

N8153W

【作者名】

アオ

【あらすじ】

「願い事を言ってみろ」

そう——見た目ただのおっさんである——神に言われて正直に願い事を言ってみると、いきなり戦いにエントリーさせられてしまった。

どうやらその戦いで勝ち残ったら願いが叶うらしいので渋々参加を決意。

しかし、その戦いが現代科学兵器ではなく超能力を使ったものだと言うからさあ大変。

おっさんからはちゃちゃつと済ませて来いと言われるし、与えられた能力はもの凄く微妙だし・・・。

極端に弱いわけでもなく、チート並みの強さでもない能力を持った少年が、今、戦場を駆け抜ける！！

※この小説は一話一話が短いです。（大体1000～3500文字を目指します）

ちよつと暇な時にでも読んでくれると嬉しいです。

第一話 神（おっさん）との出会い

———夢

人が夢を見ると、その夢の登場人物は、何に基づいて構成されているのだろうか。

多大なるインスピレーションを持っていれば別だが、大体は知っている人物が出てくるのではないか。

常に妄想を絶やさず、架空の人物の見た目を綿密に考えていれば、その架空の人物も夢に出てくるかもしれない。

実際、知り合いにも何人か、マンガやアニメ、ゲームに出てくるキャラクターが夢に出てきたと言っていた。

そう、俺が言いたいののは、夢に出てくるのは自分が知っているものだけで、自分の知らないものは出てこないという事だ。

そんな当たり前すぎる常識を、なぜ今言っているのかと言うと・・・察しのいいやつなら気付いているだろう。

即ち、俺が全く知らない人物が夢に出てきて、挙句の果てに俺に語りかけてきたのだ。

目の前にはおっさんがいる。顎に髭を蓄え、明らかにやる気とかがいろいろ抜けたような瞳をしている。

「おい、お前には、願いがあるか？」

「・・・」

「おい、」

再度語りかけてこようとする相手に、俺は質問をした。

「お前は誰だ？」

すると、相手が肩をすくめて見せた。

「人に名前を尋ねる時はまず自分から、という常識を知らないのか？」

「知ってはいるが、生憎と、俺は得体の知れない奴にこちらの情報をやるほどお人よしじゃあないんだよ」

俺の言葉がおかしかったのか、相手はふっと笑った。

「ふむ、確かにお前の言う事にも一理あるな。ではお前の質問に答えるでしょう。」

——俺は、神だ」

目の前の神と名乗る男は、自己紹介を済ませるとこちらを見てきた。

「俺は、かみやゆうすけ神谷裕介だ」

「ふむ、知っている」

「知ってるのかよ！」

「ああ、知っているとも。お前の生年月日、好きな物、嫌いな物、とな」

「だったら、何で願い事なんかを聞いて来るんだよ」

「いやな、俺が知ってるのは自己紹介のときに使うような情報だけなんだ。だから、お前の願い事は知らないんだよ」

「つかえねー。え、何ソレ。神様っていつでもその程度？」

「その程度とは失礼だな。一応、思考を読み取る事くらいは余裕だぞ」

「て、勝手に読むなよ」

「うるさい。それで、お前の願いは何だ」

「そういえばそんな事を聞いてたな。」

「——じゃあ質問に質問で返すが、それを聞いてどうするつもりだ」

「そうだな。叶えてやる事が出来るかもしれん」

「それをするメリットは？」

「そうだな。簡単に言うならば、娯楽だよ」

「は？」

「さて、そっちの質問に答えてやったんだ。今度こそ俺の質問に答えてもらうぞ」

「俺の、願い」

俺の頭によぎったのはある一つの物体。しかし、その外見を知らないのデシルエットみたいな感じだが。

これを言うべきか。けど、ちょっと言いたくないなあ。

俺がそんな風に悩んでいと、目の前の神と名乗る男が言ってきた。その言葉は、俺の悩みを解いてくれるのに十分だった。

「何を迷っている。願いとは、ある種どんな欲求よりも強いものだろう。ならば、それが叶う可能性があるのだ。言えばよい」

「俺は、あるものが欲しい」

「ほう、その欲しいものとは」

「それは――――」

第一話 神（おっさん）との出会い（後書き）

初めての方も、初めてでない方も、こんにちは。アオです。

この小説は、いつも一話一話が長つたらしい文章を書いているので、短い文章も書いてみたいという事で書き始めたものです。

つまり、何が言いたいのかと言うと、この小説は文才が無いくせに、更に慣れない書き方に挑戦しているものだという事です。

拙い文章ですが、どうぞよろしくお願いします。

第二話 俺の願ひ事（前書き）

こんにちは、アオです。

一応自分の小説では、毎回前書きと後書きを書きます。

スルーして下さっても大丈夫な内容なので、スルーするのが懸命だと思います。

そして、自分はこれの他にもう一つ小説を書いています。

自分としてはあっちが主体なので、こちらの投稿が不定期になる可能性があります。

一応、今回はちゃんと書き溜めも作っておいたので少しの間は大丈夫ですけどね。

まあ、そんな感じなので出来たら温かい目で見守ってください。

第二話 俺の願い事

「『ぺっとぷれい　くご主人様は私のド・レ・イ』だ」

「は？」

「いや、だから。『ぺっとぷれい　くご主人様は私のド・レ・イ』のDVDボックスが欲しいって言ったんだ」

「いや、何それ？　つか、そんなんでいいの？」

な、こいつは何を言ってるんだ。まさか、あの名作（俺も見たことないけど）エ○DVDを知らないだど！？

「アホか！　あのDVDはなあ、製造過程で工場が吹っ飛んで、製作者サイドにお金が無いからもう作った分だけ売ってしまおうという話になって、いざ売って見たらそれがもうかなりの好評で、じゃああえてもう作らないで置こうという話になってしまった超プレミアDVDだぞ！！」

俺が凄い剣幕で言うと、神と名乗るおっさんは腰が引けたようだった。

「そ、そうか。因みにそれって、R指定か？」

サッ

俺は咄嗟に目を逸らした。

「お前、まだ17歳だよな」

「なあ神様、こんな言葉を知っているか？」

おっさんの言う事を無視して、俺は話を切り替えた。

俺は息を吸い込み、名言を吐く準備を整える。おっさんも、黙って先を促してきた。

「――夢を追いかけるのに、年齢なんて関係ない。（b y俺）」

「やべえ、凄い感動した」

え、うそ？

「よし、お前の願い、しかと受け取った。ただ、一つだけ条件がある」

ここでおっさんは真面目な顔つきになった。

「・・・見終わったら、俺にも貸して」

「もちろんだ!!」

俺達二人は固い握手を交わした。

うん。こいつ、最初からこれが目的だったな。

「あ、ところで、DVDボックスって事は、何話があるんだよな。だったらそれらを個別で買えばいいんじゃないのか？」

おっさんの疑問は最もだ。確かに、マニアでなければそういう選択が出来たかもしれない。実際俺も見たいだけなので、それが出来たらその方法を採用してた。

しかし、このDVD、とある問題が――

「実はこのDVD、ボックスしかないんだよ」

「は、何でだ？」

「どうも、製作者が最初からボックスだけを売りに出そうとしていたらしく、単品では売ってないんだ」

「そうなのか」

「だから、尚の事ボックスには半端ないプレミアがついてるんだ」

「なるほどなあ」

俺の言葉に頷く神様。はっきり言って、この光景はかなりシニールだ。しかも、内容が内容なだけに。

と、ここでおっさんが唐突に大きく頷いた。

「よし、お前の願いは分かった。少々アレだが、まあいいだろう」

いいだろうって、いいのか？ 仮にも神様だろ？ 法律くらいは守らせようぜ。

「法律など、人間が作ったものであり、俺には関係ない。そして、

人間が神を敬うなら俺は絶対の存在だ。で、お前は俺の許しを貰ったんだ。だったら、問題は無かろう」

俺の心を読んだのか、神様がそんな事を言ってきた。

「じゃあ、お前、エントリー決定ね」

と、おっさんがいきなり意味不明なことを言い出してきた。

「は、エントリー？何が？」

「あれ、言わなかったっけ」

ここで、おっさんが何かとんでもない事をさらっと言ってきたのだった。

「——お前の願い事を叶える為には、戦場で勝ち残らなくちゃいけないんだ」

第二話 俺の願い事（後書き）

すいませんでした。

今回は話が全然進みませんでした。

いくら自分の小説ではよくあると言ってもこれは酷いですね。

何たって、一話丸々エ○DVDについてですからね！

でも次回はもう少し話が進みます。

それでは。

第三話 エントリー（前書き）

こんにちは、アオです。

一挙に三話投稿。・・・つらい、こちらのライフがガリガリと削られていく。

因みに小説の話をしますと、今回はやっと動き出します。

内容は、読んでお確かめください。

第三話 エントリー

「戦場で勝ち残るだって？そんなの聞いてないぞ」

「悪い。忘れてたっぽい」

忘れてたっぽいって、内容の割りに言い方軽くな？

「まあ別にいいじゃないか。ちよつと行って来てさっさーと勝ち残れば」

いやいや！そんな簡単にはいかないからな！

「無理！戦場で勝ち残るなんて、現代日本で暮らしてきた俺には無理だから！」

「と言われても、もうエントリーしちゃったから」

「何勝手なことしてくれてんだよ！」

俺がおっさんに食って掛かると、急におっさんが真面目な顔つきになった。

「甘えるなよ。何の苦労もなしに、願いが叶うと思ったのか」

その言葉に、俺はうつ、と息を詰ませた。

確かに、何の苦労もなしに願い事が叶うなんてうますぎる話があるわけがない。

人は誰しも自分の願いを叶える為に努力をしているんだ。

どうやら俺は、そんな当たり前な事を失念していたようだった。

「まあ安心しろ。戦場と言っても、別に銃火器や爆発物が飛び交うような場所ではない」

その言葉を聞いて、俺は胸をなでおろすと同時に違和感を覚えた。

「兵器が飛び交わないのに戦場って、一体どういうことだ？」

俺の質問を聞くと、おっさんはふむ、と蓄えられたあごひげを撫でた。

「そうだな。ある意味、兵器が使われている戦場の方がまだ簡単かもしれないな」

「なんだよ、もったいぶらずに言ってくれよ」

「お前が行く戦場は兵器ではなく、超能力を使って戦うんだ」

「は、超能力？」

「ああ。お前の他にも願いを叶える為にエントリーした奴がいる。そして、一人一つずつ、能力を与えられるんだ。その能力を使って戦い、勝ち残ったものが願いを叶えられるといった所だ」

「なるほどな」

おっさんの言った事は、俺の疑問を解消するのには十分だった。

兵器ではなく超能力を使って戦う。

確かにそれならば戦場と言っても差し支えないだろう。

何と言っても、兵器よりさらに未知の領域なのだ。どんな能力なのかも、どんな効果を持っているのかも分からない。

そしてそんな能力^{モノ}を使って戦うのだ。その戦いは過酷なものとなるだろう。

そんな風に考えてると、おっさんが心配そうに話しかけてきた。

「なるほどなって、本当に分かってるのか？」

「ああ。おっさんが戦場といった意味、ちゃんと理解したぜ」

「ほう、じゃあ言ってみろ」

「まず第一に、与えられる能力の強さだ。人が拳銃を持って撃ち合いを始めたら、それだけでそこは戦場だ。つまり、最低でもそれぐらいの能力は与えられるという事だ」

俺が一つ目に理由を説明すると、おっさんはほう、と感心したようだった。

「そして第二に、超能力という未開拓な分野における情報の不足だ。相手がどんな能力を持っているのか。又、その能力の弱点、長所、対処法といった内容は分からない。兵器を使った戦争で例えるなら、

例え相手の武器が分かって、生身の状態では現代科学には勝てない。この二つは違う事を言ってるように思えるが、対処が出来ないという点では一緒だ。そして、それがあるからこそ戦場となりうる」

俺が言い終わると、おっさんは驚きに目を丸くしていた。

「凄いな。あれだけでここまで分析するとは。」

「――どうやら俺は、凄い奴を選んだのかもしれないな」

最後の方は聞き取れなかったが、どうやらおっさんは俺に感心しているようだった。

「それで、俺はあんたの話をちゃんと理解できてたか？」

「ああ」

俺の質問に神妙に頷くおっさん。どうやら俺の考察は間違ってたようだった。

「よし、それじゃあお前に能力を与えてやる。こっちへ来い」

俺がおっさんの傍に行くと、おっさんが俺の頭に手を置いた。

すると、俺の頭上から光が溢れてきた。

「さて、終わったぞ」

「もうか？早いな。それで、俺にそんな能力を与えたんだ？」

俺は若干興奮しながらおっさんに問いかけた。だって超能力だぜ。

誰でも必ず一度は夢見るものが俺に与えられたんだ。そりゃ興奮するって。

が、そんな俺の気持ちをおっさんは容易く吹き飛ばした。

「んなもんは知らん」

「は？」

そんな俺の疑問を解消するべく、おっさんから理由を聞いたのだした。

「なるほどな。そういうわけか」

「そうだ。お前の能力は後で自分で検索してみるといい。そら、さっさと行って来い」

俺はおっさんに背中を押され、次の瞬間、景色が変わり、目の前には見慣れない景色があった。

【side—???】

「さて、これで揃ったか」

俺は小僧をほっぽり出した後、ティータイムに入っていた。

「しかし、あいつ結局、終始俺の事おっさん呼ばわりだったな」

あいつ自身、俺の事をおっさんとはあまり口に出さなかったが、心ではメチャクチャおっさんと呼んでいた。

「しかし、あの小僧、面白くしてくれそうだな」

これならば、或いは――

俺は、もしかしたら訪れるかもしれない未来へと期待を膨らませた。

第三話 エントリー（後書き）

えー、いつになったら能力バトルが始まるんだと思っている皆様に謝罪を。

すいません。まだそういうのは先です。

プロローグは、まだあと三話続きます。

長い！と思われるでしょうが、もう暫くお待ちください。

で、今日は三話投稿したので次話は明日投稿します。
それでは。

第四話 戦いの概要（前書き）

こんにちは、アオです。

今回のタイトルは何のひねりもありません。
所謂直球勝負です。

もうちょっとイカした名前を付けたかったんですけどね。
本当、つくづく自分のネーミングセンスの無さに呆れています。

あと、言い忘れてましたが、◇が並んでるのは時間経過、ゝが並ぶのは回想を表します。

第四話 戦いの概要

「よ、っと」

俺は真上に高く石を投げ上げた。

すると、当然石は重力という物理法則に従い、俺に向かって落ちてくる。

「はあ——！」

俺は意識を集中させて、自らの能力を発動させた。

すると、石は俺に当たらず、俺の一メートル上くらいで何度かバウンドしてから静止した。

俺はここ5日間ほど、このように能力を磨き続けていた。

何故こんな事をしているのかと言うと、あのおっさんが言うには――

~~~~~

「とりあえず、今からお前を異世界へ転移させる」

「は、何でだ？」



「いきなり与えられた能力で戦えというのも酷だろう。だから、参加者は能力を与えられたら異世界へと飛ばされ、そこで能力を慣らすんだ」

「そうか、確かに与えられても使えなければ意味が無いからな。因みに、練習期間ってどれくらいだ？」

「お前が最後の参加者だからな。お前が異世界に飛ばされてから1週間だ」

ん？何か今おかしい事言わなかったか？

「え、俺が最後？」

「ああ、そうだ」

「・・・因みに、俺より前にエントリーした奴らって今何してる？」

「ん？多分能力の練習だろう」

コイツは何を言ってるんだ？じゃあもしかして、今こうしてるうちにも、ライバルはどんどん腕を上げてるってことか？

「ま、そうだな」

「だったら早く俺も転移してくれ。今こうしてる間にも相手が有利になっていくじゃねえか！」

「まあ落ち着け。一応、お前のような奴、つまりは一番最後にエントリーした奴にもいい事がある」

「それは？」

「それはだな、お前が飛ばされた世界が戦場になるんだ。ここまで言えば、後は分かるだろ」

「なるほど。つまり俺には能力の上達の変わりに地の利があるというわけか」

「そういう事だ。つーわけで落ち着いて俺の説明を聞け。まだ終わってないから」

俺が落ち着いたのを見ると、おっさんはこの戦いについての説明を始めた。

簡単にするとこんな感じだ。

参加者は自分を含めて全部で7人。

最後に残ったものが、願いを叶える事が出来る。

参加者に与えられる能力はランダムで決まる。だが、基本的に自分の器の大きさにあった能力が与えられるらしい。

参加者の能力の強さなどは、それぞれの器によって前後する。

能力は使うときに精神力を必要とする。なので、連続して使い続けると気絶するらしい。

勝負の勝敗は、意識を失なわせたかどうかで決まる。

この“意識を失う”の中には能力の多用による気絶も含まれる。

参加者は超能力のほかに補助能力というのも与えられる。

補助能力というのは、主に自身の能力を補助するものであり、精神力を必要とするのもあれば、いらぬものもある。

戦いの最中、参加者達は現実世界から居なくなるわけだが、それについてはあっちが何とかしてくれるらしい。

と、こんな所だ。

説明を終えると、おっさんは俺を異世界へと転移させ、そして今に至る。

「はー」

俺は何度目か分からない溜息を吐いた。

俺の能力は、本来ならものすごい力を発揮する能力なのだが、俺が使うとその限りではない。

どうやらこれは、容量の大きい能力が俺の許容量を大きく上回ったため、能力が随分スケールダウンしてしまったようだ。

俺もここに来て、自分の能力の低さを知った時は泣きなくなった。

器の小さい男ってモテないらしいから尚の事凹んだのも覚えている。

——そう、あれは、俺がここに来た時の事だった。

#### 第四話 戦いの概要（後書き）

今日はあともう一話投稿します。

連続して投稿するのもいいんですが、時間を空けた方が読者数が増えるんじゃないかという、邪な考えがあります・・・。

やっぱり書くからには多くの人に読んでもらいたいのが本音ですからね。

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第五話 能力詳細（前書き）

ついに、裕介の能力が分かります。

いやー、ここまで長かった・・・。

本当はもっと早くに書きたかったんですが、説明文とかの都合上・・・。

前にも言いましたが、プロローグはこれを入れてあと二話あります。冗長な文章ですが、どうぞお付き合いください。

## 第五話 能力詳細

ここに來た初日、俺はさっそく自分の能力が何なのかを検索した。

あのおっさんの言うには、自分の能力の詳細については、自分に問いかねばすぐ分かるとのこと。

さっそく俺も、言われたとおりにやってみた。

能力名…“停止”

能力…自分が視認しているものの動きを止めることが出来る。

「おおー！」

超能力が使える上、更にはこんなに優れた能力が与えられた事に、俺は喜び、興奮した。

しかし、それらは次に来る能力の説明で一氣に吹き飛んだ。

注意…能力の容量に対する器の大きさが足りないため、効果が激減。

「――は？」

今、何て言った？俺が呆けているのにも関わらず、説明が続いてゆく。しかもそれは、俺を更にどん底へと突き落とす言葉だった。

――尚、この能力の強さは、本来の10分の1まで低下。

「はあ――！？」

頭に響く説明を振り払うかのごとく、俺は絶叫した。



「はー」

とまあ、こんな感じだ。

この後、俺は自分の器の小ささに絶望したりもしたが、取り合えず前向きにものを考えようと言う事で能力を使いこなすために練習に励んでいる。

「でも、やっぱりなんだかなあ」

俺の能力“停止”は、？ものの動きを止める？という能力だが、俺のは動きを止めることなど出来ず、精々？ものの速度を落とす？のがやっとである。

けれど、一応は？小さくてそこまで力が働いてないもの？なら動きを止める事が出来るが、そんな事が出来てもこれから起こるであろう戦いにおいては無価値である。

しかも、俺の能力は、能力の効果範囲が広げれば広げるほど効力が減っていく。

はっきり言って、微妙極まりない。



しかし、能力は弱いが、逆にいい事もあった。

その一つ目が、俺の補助能力にある。

俺の補助能力は、【視覚操作】だ。

【視覚操作】とは、自分の見ているものを自由に見ることが出来るで  
きる能力だ。

この能力の本質は、視覚を制御できる点にある。

この能力を使い、自分が視認したいものを指定する。これだけを聞  
いてもよく分からないだろうが、俺の能力“停止”は、自分が視認  
しているものだけが固められる能力なのだ。

なので、自分の見るものを制御できると言うのは大変便利な技であ  
る。

この補助能力が、一つ目の利点である。

そして二つ目が、先程やった、空中に投げた石を止めた技の事であ  
る。

俺は、空間を指定し、動きを止める、事によって空気の壁を作った  
のだ。

この技を俺は＜空間停止＞と呼んでいる。

他にも、自分が指定した場所にあるものの全ての動きを止める技。こ  
れを＜位置停止＞と呼んでいる。

そして、物体を指定し、その動きを止める（というか鈍らせる）技、これを＜物体停止＞という。

これらの技が俺の二つ目の利点だ。

で、これらの何がいいのかって言うと、それは汎用性・応用性の高さだ。

俺は元々、工夫だとかそういうのが好きなので、ある種、この能力は俺向きと言えるだろう。

つーか、そう思わないとやっていけない。

何たって、俺の器が小さいお陰で能力が弱くなってるわけだし。（視覚操作の方は問題なかった）

今一度、あともう一回言おう。

「何で、何で俺の器はこんなに小さいんだー！ー！！」

「これじゃ女の子にモテねーじゃねーかー！ー！！」

そっちかよー！！というツツコミが聞こえたような気がしなくも無いが、多分気のせいだろう。

「ま、愚痴っててもしょうがないか」

切り替え早！？というのも多分空耳だな。

とりあえず、能力の練習はこれまでにして、戦場となる場所を見ておくとしようかね。

## 第五話 能力詳細（後書き）

こんにちは、アオです。

いつものフリーズを後書きに書いてみました。（どうでもいい上に特に意味はないですが・・・）

こんな感じで、前書きと後書きは無法地帯です。

さて、話は変わりますが、今日の投稿はこれで終了です。

次の投稿はいつになるか分かりませんが、次でプロローグはラストです。

## 第六話 決戦前夜（前書き）

こんにちは、アオです。

これでプロローグは終了です。

次回から本編に入りますが、その前にちょっと問題が・・・。  
何が問題なのか気になる方は後書きまでGO！↓

## 第六話 決戦前夜

空が明るくなり始めている。

練習期間終了まで、あともう少しと言った所だ。

俺がここに来た時は、太陽が昇ってすぐの朝7時位だったので、多分あと2時間くらいだろう。

俺は、能力の練習もそこそこに、戦場となる場所を2日ほどかけて回った。

地形の把握は思ったより早く終わり、残りの時間を逃走ルートの確保などに使った。

そして、俺がいる世界だが、幾つかのエリアに分かれていた。

まず最初に今俺がいる？海？エリア。

植物や木などが沢山ある？森？エリア。

遮蔽物などが全く無い？平原？エリア。

多少の遮蔽物はあるが、それ以外は砂しかない？砂漠？エリア。

川や湖などがある？水源？エリア。

幾つもの家が建っている？民家？エリア。

と、この6つのエリアに分かれている。

食料などは？海？か？森？エリアで。

水分は？水源？エリアで。

そして、雨風を凌ぐときは？民家？エリアで済ませようと思っている。

実は、この世界にも天気があり、今は晴れである。

3日くらい前にも雨が降ったので、？民家？エリアで寝泊りをした。

とりあえず、この6つのエリアのうち、俺は？海？と？森？エリアを主な拠点にしようと思っている。

？民家？エリアにしないのは、参加者達も必ずここに来たら家を調べると思うからだ。

もしかしたら、碌に調べもせずに家を吹っ飛ばされる可能性もある。俺は休憩中にいきなり吹っ飛ばされるのは勘弁願いたいので却下。

そして、俺が地味に危険だと考えているのが？水源？エリア。

海の水は海水だし、森で採れる果実に含まれている水分も物足りない感じなので、唯一の水源であるこのエリアには、参加者が常に必ず一人はいるだろう。

他の？平原？と？砂漠？エリアは論外だ。俺の能力ではこういう遮蔽物が少ない場所は不利でしかない。

尤も、俺の能力の本来の力が出せば問題ないのだが、無いものねだりをして意味が無い。

と、思考に耽っていたら、急に空が暗くなり始めた。

『はい、初めまして。最後の参加者さん』

声は妙に高いので、女の声に聞こえなくも無いが、男と言われても頷ける感じだ。

『では、開始まであと2時間です。貴方にはそれまで少々眠ってもらいます』

「は、何でだよ？」

『公平にするためです。開始前後には目が覚めるように致しますのでご安心を。他の参加者の方たちも、意識を失った状態でこの世界に転移され、開始前後に目が覚めます』

「なるほど」

だったら俺に異論は無いな。

『あと、貴方は今いる場所では目覚めません』

「はい？」

どういうことだ。今いる場所では目覚めないという事は、どこかに移動でもされるのか？



『はい、その通りです。こちらでも公平を期すため、他の参加者達と一緒に、この世界のどこかにワープしてもらいます』

今の疑問、口には出してないはずだが……。こいつ、俺の心を読んだな。という事は、この声の奴も神かなんかなのか。

ん、つーかまでよ。今のコイツの回答、ちょっとヤバくね？

「つー事はあれか？他の参加者の近くで目を覚ます可能性もあるって事か？」

俺の能力はただでさえ弱いんだから、そんな事は御免こうむりたい。

『その点については問題ありません。参加者達はそれぞれ、半径1km以内に誰も居ない場所へと飛ばされるので』

「そ、そうか」

それなら安心だ。

『もう質問はございませんか？無ければ眠っていただきますが』

「ああ、もうない」

その言葉を言い終えると同時に、俺の意識は遠のき始め、やがて、意識を失った。

—————次に目が覚めたとき、ここは、戦場と化す。

## 第六話 決戦前夜（後書き）

回答のお時間がやってまいりました。

問題点とは・・・次章のタイトルが決まらない事です。

なので、一応次章はつくりますが名前は？未定？という風にします。  
決まり次第変更します。

それでは。

## 第七話 出会い（前書き）

やっところさ本編に入ります。

いやーここまで長かった。プロローグが思ったより長引きました。拙い文書ですが、よろしくお願いします。

あ、因みに章タイトルの問題は無事に解決できました。お騒がせしてすみません。

## 第七話 出会い

「うーん・・・」

・・・

・・・

ガバツ！

「ここは・・・」

俺が目を覚ますと、周りには何も無い景色があった。

「ここは・・・？平原？エリアか」

周りには何も無く、あるのは気持ちのいい風とそこらに生えわたる名も無き草達（名はあるんだろうが、雑草の名前なんて普通知らなくね？）だけの景色は？平原？エリアに違いなかった。

「こんな何も無い所にいたら直ぐに見つかっちゃうな」

元々俺は？平原？エリアに用は無かったので、すぐさま移動を開始する。

これだけ何も無い所では、いつ攻撃されるか分かったもんじゃない。

「差しあたっては、？森？エリアにでも行くかな」

あそこは障害物もたくさんあるし、何より果実がある。寝起きで若干腹をすかせている身としては、早く食事でありつきたいというのが本音だ。

「さて、それじゃあ行きますかね」

どっこいせ（かなり年寄りくさいが、皆も立ち上がる時は掛け声を発するだろう。ならイーブンだ）、と立ち上がった時に、ふと、首に違和感を感じた。

シャラリ

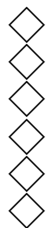
「ん？何だこれ？」

俺の首には細長いクリスタルのようなものが先端についたネックレスが掛けられていた。

俺が意識を失う前にはこんなものは無かったはずだ。という事は、これは俺が意識を失った時に付けられたものだろう。

「ま、ちょっとカッコイイ感じがするしいいか」

別にこれを外す理由が無いし、外したらなんか危ないような気がしたので、俺はそのまま放置する事にして、？森？エリアへと向かった。



「よし着いた」

道中、誰とも会うことなく？森？エリアへと辿り着く事が出来た。

しかし、油断は出来ない。

昨日言われた参加者のワープ地点から言って、一つのエリアに一人いるような計算になる。

つまり、ここのエリアには参加者がいる可能性が高い。

「でもま、そこまで警戒してもアレだし、まずは食料から調達し直すかね」

腹の空腹感は減るどころか増すばかりなので、俺としてはさっさと食事にありつきたい。

そんな感じで歩いていると、急に声が聞こえてきた。

「!？」

木の陰に身を隠し、辺りを窺っていると、微かだが声が聞こえてきたような気がした。

取り合えず、相手の情報を探る為にももう少し近づいてみるとしよう。

幸い、俺はここの地理は詳しいしな。

声のした方へ近づいてみると、声は段々はっきり聞こえるようにな

ってきた。

声からして、どうやら女性のようなだ。

そつと、俺は木の幹に隠れ、何を喋っているのか聞き耳を立てた。

「ううう、お腹すいたー」

――！！

俺はずっこけそうになるのを必死に堪えた。

今、何て言った？

もう一度聞くべく、俺は聞き耳を立てた。

「はあー、お腹すいたよう。支給された食料は失くしちゃったし、お腹はすくし・・・ここ最近誰とも会って話せてないし・・・ああー、誰か優しい人が食料分けてくれないかなあ」

へー、食料なんて支給されていたのか。俺にはされていなかったが、多分、ここの地理に詳しいと言う事で外されたのかもしれないな。

因みに女性の外見はと言うと、160近い身長で、黒い髪を背中 of 肩甲骨辺りまで伸ばしている。見た目的には俺と同年くらいだが、精神面が若干幼い気がするので、実年齢はよく分からない。

・・・それにしても、いろいろと突っ込みたい事がある。

まず最初に、そんなに大事なものの、何故失くした！？

流石に食料は失くしちゃいかんだろう。

次に、バトルロワイヤルで誰かと話したいって何だよ！脳みそお花畑か！？

他にも、食料を分けてくれないかだって？ だから、何でバトルロワイヤルなのに敵と食料を分け合うんだよ！！

そしてこれが最後であり、俺が最も言いたい事だ。

—————食料ならそこらに生えてるだろうが！！お前の目は節穴か！！？

そう、今も普通に周りの木には果実が生っていて、見た目甘くておいしいそう。

何だ？アイツは俺の存在に気付いていてわざとあんな発言をしているのか？

ふむ、そう考えれば納得がいくな。あいつは俺の存在に気付いていて、俺を油断させようとしているわけだ。

ふふん。だが甘いな。そうと気付いてしまえばこちらのものよ。背後から襲って早速リタイアしてもらうぜ。

よし、そうと決まれば回り道をしてあいつの背後に—————

ぐー



・・・今の音は俺からはしてない。とすると――――

「ううー。お腹すいたようー」

・・・確定。こいつは天然<sup>バカ</sup>だ。

しょうがない、ここは一つ、姿を現して食料が生えてる事でも教えてあげましようかね。

こうやって敵である少女相手にも情けをかける俺は生粋の紳士である。

という事で、紳士な俺は姿を現す事にした。

・・・別に、俺もさっさと何か食べたいってわけじゃないんだからね！

## 第七話 出会い（後書き）

本当は昨日投稿したかったのですが、私事により出来ませんでした。  
一応、何も無ければ明日も投稿する予定です。  
それでは。

## 第八話　ちょっと強引な接触（前書き）

キツイ。

短い文章書くのキツイ・・・。

やっぱり自分は無駄に長い文章書くのがいいのかなあ・・・。  
と思う今日この頃。

もしかしたらその内短文を諦めるかもしれませんが、ご注意ください。  
い。

まあ、今のところは大丈夫です。多分・・・。

## 第八話　ちょっと強引な接触

「――まずい」

うん。まずいな。

何がまずいのかって言うと、いきなり出たら驚かれて攻撃されるかもしれないって事だ。

害意はないのに攻撃されてゲームオーバーなんて洒落にならない。

人間、突発的なアクシデントには弱いので、どんな行動をするか分からないのだ。

だったら、別に声を掛けないで素通りすればいいと思うだろうが、俺にはある考えがあった。

即ち、あの少女を味方に、ないしは同盟を組む事だ。

さっきの発言を聞いた限り、この少女は味方を裏切るような事はしないだろう。

ま、その推測の四割が勘なんだが・・・。

しかし、若いうちは考える前に行動しろ、とどこかの偉い人も言っていたような気がするので、まずは行動に移すことにしよう。

「つーわけで、やってみるか」

ま、いきなり能力を打ち込まれたり、味方にするのを失敗しても大丈夫な策でいくけどな。

「――空間停止」

俺は歩いている少女の足元を指定し、その空間の動きを止める。

案の定、少女はその位置に足を引っ掛けて、地面に倒れた。

「え、あれ？――きゃっ！」

俺は素早く少女の後ろに回りこんだ。

「動くな」

その俺の言葉を聞くと、相手はびくつ、と体を震わせたが、こちらの指示通り動かなかった。

「さて、こんな接触の仕方ですまない。

一応自己紹介をしよう。俺の名前は神谷裕介、――お前は？」

俺が自己紹介をしたのには理由があった。

その理由とは、相手の警戒心を少しでも薄れさせる事だ。

自己紹介をすれば、多少は冷静になり、考える事も出来る。

「・・・進藤優衣です」

「よし、それじゃあ進藤。こちらは今のところ君を攻撃する意思は

無い。この言葉を信用するしないも君の自由だが、できたら信じて欲しい」

「・・・いきなり背後を襲う相手を信じるとでも？」

「まあ、普通は信じないよな。  
つーわけで、少しでも信じてもらいたいからこれをやろう」

そう言って、俺は襲う前に採って置いた果物を進藤という少女の目の前に落とした。

「腹、空いてるんだろ？それでも食べな。  
一応言っておくが、毒は入ってないからな」

「・・・」

俺が果物を出した時に反応はしたが、まだ警戒しているようだった。

「しょうがないなあ。  
・・・ほら、これで毒が無い事が分かっただろう」

俺は出した果物を一口かじり、それを渡した。

「・・・毒が無い事は分かりました。しかし、動いてはいけないのなら食べる事は出来ないんですが」

「・・・嫌味かよ。分かった、俺の言葉を信用するなら動いてもいいぞ」

「・・・」

再度黙り込む進藤と言う少女。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

黙り込む事十数秒、相手はこちらを振り向く事はしないが、俺に意識を傾けたあと、果物へと手を伸ばした。

「よし、交渉成立だな」

「貴方には今のでメリットがあったように思えませんが」

「そんな事はない。それを手に取ったという事は、俺を信用したって事だろう。これで落ち着いて話をする事が出来る」

「完璧には信用してませんが、取り合えず、私を襲いはしたものの気絶まではさせなかったので・・・。それらを考えた末の選択です」

「へえ、お前、意外と頭が回るんだな」

「な！あなたは「はいはいその前に」・・・何ですか」

「とりあえず、さ。立たないか？立って、ちゃんと向き合って喋ろうか。じゃないと話がしづらい」

「私を転ばしたのはあなたでしょう」

「確かにそうだが、俺は動いてもいい、と言ったはずだ。それなのにお前が倒れこんだままだったんだろう？何だ、もしかして地面に寝そべりながら背後にいる相手と話すのが好きなのか？人の好き嫌いのついてとやかく言うつもりはないが、こっちからすると、その状態で話すのって、さっきのような緊張感が無い限りイタイ子にしか見えないぞ」

「／／／」

俺がそう言うと、顔を赤くして慌てて立ち上がった。

そして、パンパンと服を払いながらこちらを睨み、

「今の私のあなたに対する評価は最悪です」

と、そんな恨み言を言ってきた。

ま、気にはしないけどな。

なにはともあれ、ようやく正面向いて安全に話す事が出来る。

しかし、こちらを見る進藤の目は怖い。

・・・同盟なんて組めるのか？これ。



## 第八話　ちょっと強引な接触（後書き）

本当はもう少し進めるつもりだったのですが、あれよあれよと言う間に文字数が増えてしまったので、こんな中途半端な終わり方になってしまいました。

うーん、やっぱり少ない文字で多くを語ると言うのは難しいですね。前書きでも書きましたが、もしかしたらその内文字数がいきなり増えるかもしれません。特に戦闘描写は下手くそなので長いです（予告）。

その内、最初の方と見比べてみたりすると面白いかもしれませんね。アレ？段々文字数が増えてるぞ？みたいな。

感想、評価などお待ちしますので、是非してください。  
それでは。

**第九話 俺は鈍感なんかじゃない（前書き）**

今回はあまり進展しません。

## 第九話 俺は鈍感なんかじゃない

「・・・」

「・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

・・・

・・・

・・・お、重てえ！

何、この空気？メチャクチャ重いんですけど!？

———今、俺と進藤は睨み合い?をしている。

原因は俺のさっきの発言にあるのだが、はっきり言ってこれだと喋りづらい。

まださっきの方がマシだった。しかし、今さら———

「ねえ、この状態だと喋りづらいからさ、さっきみたいにこっち見ないで地面にうつ伏せてくれない?」

・・・言えねえ!!

ちくしょう、何か、何か会話の糸口さえ見つければ！

そう思い進藤を凝視していると、ある一つの物体が目に入った。

———これだああああ！！

「なあ、それ食べないのか？」

俺が指摘したのは、進藤が持っている果実だった。うん、我ながら  
ナイスじゃね？

「あ・・・」

進藤も気付いたのか、俺が渡した果実へと目を向けた。

「・・・」

「・・・」

果実を見続ける進藤。その視線は、果実の内側、要は果肉の辺りに  
向けられていた。

もしかして、まだ毒があるのか疑っているのだろうか。俺が齧って  
ないことを証明したんだが・・・実は疑り深いのか？

——と、ふいに、その視線が俺へと向けられ、俺が何だ？と視線  
を向けるとまた果実へと向けた。

暫くそれを繰り返していると、進藤が若干頬を赤くして——

「あの――」

「ん、何だ？」

「いえ、その・・・」

「うん、何だ？見たことない果実だから警戒してるのか？」

そう、進藤が持っている果実は、俺や進藤がいた世界にはないものだった。

俺も最初は食べられるのかと疑っていたが、余りにも腹が減っていたので食べてみたらこれが結構いけていた。

因みに、果実の種類はこれだけでなく、もうあと2種類ほどある。それぞれ形は同じだが色が違い、味も異なる。

今進藤が持っている果実は紫色の丸型で林檎みたいな味をしている。他にも黄色、赤色の果実があり、それぞれブドウ、パイナップル味となっている。

配色間違えてない？と思ったのだが、まあ仮にもここは異世界だしなと自分に言い聞かせ、納得する事にした。

「その果実は林檎の味がするんだが、もしかして林檎は嫌いだったか？」

俺がそう聞くと、進藤は一瞬驚いたような顔になり、やがて呆れ顔をして遂には溜息までしてくださりやがった。

「ねえ、神谷君って年幾つ？」

「17だが・・・」

「そうなんだ。私と一緒にだね」

「うん、それがどうした？」

ほう、俺と同じ年だったか。てっきりあの発言から中学生か一つ下だと思っていたんだが・・・。

そんな俺の思考など知らずに、進藤はさらに質問してきた。

「いや・・・。神谷君ってさ、鈍い？若しくは友達とかに鈍感って言われない？」

「む・・・」

失礼な。

俺が鈍感だと？

今まで自分がそうだと思ったことはないし、言われた事も無い。

「失礼な。俺は鈍感じゃないし、他人からも言われた事なんて無いぞ」

俺がそう言うと、進藤は軽く微笑み、俺はそれに一瞬ドキリとした。

「なら覚えておいて。神谷君って、ちょっと鈍感だよ」

そういい終わると、俺が何かを言う前に進藤は果実を食べ始めた。

いつの間にか進藤の視線はそこまでキツイものではなくなり、更には張り詰めていた空気まで弛緩していた。

・・・何で？

## 第九話 俺は鈍感なんかじゃない（後書き）

こんにちは、アオです。

前書きが適当じゃね？と思った方、その通りです。

何かもう書くこと無くなってきました。どうしよう。

なら書くなよ、と思いますが、自分はメールには必ず件名を書く変人なので、こればかりは……。ま、たまに書き忘れたり書かない事もあるんですけどね。

話は変わりますが、次回から説明回となります。

一応二、三話で終わらせる予定ですが、どうなるか分かりません。

それでは今回の話について話します（順序が逆ですよね）。

裕介ですが、別に鈍感と言うわけではないんです。

ただ、裕介自身は違う理由でやったので自覚が無いだけです。↑これを鈍感と言う。

一応、自分としては若干鈍感設定でいきますが、もしかしたら若干ではなくなるかもしれません。ご了承ください。

それでは。



## 第十話 罪悪感（前書き）

今回の話は割りとメチャクチャです。

サブタイトルどおりの展開にしようと思ったたらこんな感じに・・・。  
今回はいつにも増して稚拙な文ですが、見捨てたりしないでください。

## 第十話 罪悪感

進藤が食べ終わると、さっきまでの緊迫した空気はどこへやら。すっかり普通の空気に戻っていた。

「さて、それで神谷君の話って何？」

と、食べ終わって少ししてから進藤が本題を尋ねてきた。

・・・危ねえ、ちょっと忘れかけてたよ。

「ああ、その事なんだが・・・俺と組まないか？」

俺がそう提案すると、進藤は驚いていた。

「神谷君、これってバトルロワイヤルなんだよ。誰かと組んで勝ち残ったとしても、結局最後には戦う事になるんだよ」

進藤は、それなのに組む必要なんてあるの？と目で訴えてきた。

「いやね。別に、俺は願い事はあるけど、そこまでして叶えたいものってわけじゃないんだ。だから、別に負けてもどうって事は無いんだ」

「・・・」

進藤は俺の発言に思案顔となった。

当然と言えば当然か。何せ、誰かと組むって事は自分の願い事を他

人に預けるという事だ。しかも、預ける相手は別に勝敗なんてどうでもいいと言っている。

疑うのは当然だし、例え組んだとしても途中で諦められたらそれでお終いだ。

やがて、進藤は顔を上げて俺に聞いてきた。

「神谷君の願い事って、なに？」

「俺の、願い事・・・」

願い事…『ぺっとぷれい　くご主人様は私のド・レ・イ』のD V Dボックス

・  
・  
・

・  
・  
・

———言えねえ!!

どうしよう。そりゃあ、あんな言い方したら俺がどんな願い事を持っているのか気になるだろう。進藤のように質問してくるのは当然だ。

しかし、俺の願い事は端的に言えばエ○D V Dが欲しいというもの。俺だって紳士の端くれだ。年頃の女の子相手にそんな事言えるわけがねえ。

しかし、ならどうする。

嘘を吐く、という手段があるが、俺はあまり嘘というものを吐きたくない。

ならどうする？どうするよ俺？どうする！！？

俺のライフカードは

・ 本当のことを言う

・ 嘘を吐く

・ 軽やかにごまかす

——よし、一番下のやつでいこう。

俺がそう決めて進藤に言おうとすると、俺の沈黙をどう受け取ったのか、進藤は申し訳なさそうな顔をした。

「あ、別に無理に言わなくてもいいよ。というかごめんね。願い事なんて、他人にあんまり言いたくないよね」

ごめんね。と申し訳なさそうに謝る進藤。

うう、俺の方が申し訳ない。というか居心地が悪すぎる。

しかし——「でも、」と進藤が付け加える。

「でも、これだけは答えて欲しいな。神谷君の願い事って、悪い事？」

はい、悪い事です。

すみません。俺まだ17なのに調子乗りました。ほんとマジすいませんでした。

と、これまた俺の沈黙をどう受け取ったのか、進藤は慌てて付け加えた。

「あ、いきなり悪い事って言われても困るよね。私が言ってるのは、神谷君が世界征服だとかそんな事を考えてないかなって事なの」

あ、何だ。そういう事。

だったら俺にそんな願望は無い。これには安心して頷ける。

俺が頷くと、進藤は安心したような顔となった。

「そう、よかったあ。私、そういう人達が勝ち残らないようにこのバトルに参加したの」

「え？そんな簡単に信じていいの？」

「うん。私の能力でね、神谷君が嘘を吐いているかどうか分かるの」

・・・おっそろしい能力だな。

と、俺がそんな事を思っている間に進藤は続けた。

「うん、本当に良かった。・・・最初はどうかと思って心配したけどね」

そう言って、意地悪そうにこちらを見る進藤。その言葉に俺はさらに申し訳なくなった。

うん、そうだよな。最初、かなり驚かせるような接触の仕方だったしな。反省。

「でもさ、私の能力、嘘を吐いているかはつきりと分かるわけじゃないんだ」

あ、そうなんだ。

でもどうしたんだいきなり？

「だから、最後の方は結局相手を信じるしかないんだ。

——ねえ、神谷君、あなたの願いは、他人に迷惑を掛ける事？」

「大丈夫だ、そんな事は断じてない。進藤が思っているような願いは持ってなんかいないよ」

俺がそう答えると、進藤は嬉しそうに笑った。

「そうか、よかった。神谷君が悪い人じゃなくて」

・・・すいません

俺、メチャクチャ邪な願いです。

あなたが眩しすぎます。

だから、そんな目で俺を見ないで！

猛省。

没小ネタ

「神谷君の願い事って、なに？」

そう、進藤が真っ直ぐな瞳で聞いてきたので、俺もその瞳を見ながら答えた。

「『ぺつとぷれい　くご主人様は私のド・レ・イ』のDVDボックスだ」

「え？」

「知らないのか？超プレミアの激レアで極エ〇なDVDの事だ」

・  
・  
・

・  
・  
・

同盟は破綻しましたとさ。



## 第十話 罪悪感（後書き）

こんにちは、アオです。

はい、おもいつきしグダグダでしたね（特に最後の方）。

自分の文才の無さに呆れて何も言えません。

もう少し、他の人の書き方を吸収できたらと思っています。

今回はあまり説明回っぽくなかったですが、次回はもう少しそれっぽいです。

それでは。

## 第十一話 早起きは三文の得（前書き）

今回の内容ですが、ミスりました。

具体的なことをここで言うとなタバレになってしまいますので後書きで書きますが、例の如くミスりました。

そんなん気にしないぜ！という方はどうぞお読みください。そうではないという方も出来たら読んでください。

## 第十一話 早起きは三文の得

「――なあ、もうそろそろ答えて欲しいんだけど」

あまりにもいたたまれないので俺は話題を変えることにした。

と、俺がそう聞くと、進藤は微笑んで、

「うん。頼りにならないかもしれないけど、私で良ければいいよ」

進藤はそう言って手を差し出してきたので、俺はその手を握った。

「ああ、じゃあよろしくな。優衣」

俺がそう言うと、優衣は怪訝な表情をした。

「え、と、何で下の名前なの？」

「これは俺の主観なんだが、これから背中を預ける相手を苗字で呼ぶってのも何か変だろ？だから、名前で呼ぶことにしたんだ。あ、別にこれは俺の我儘だから優衣は気にせず俺の事は好きに呼んでいいぞ」

「ううん。神谷君の言う事もっともだと思う。だから、私も裕介君って呼ぶね？」

「ああ、別に構わない」

と、そんな感じで笑いあっていると、急に俺の腹が鳴り出した。

「・・・悪い。俺、結構腹減ってるんだ。取り合えず、食事にしようか」

俺がそう提案すると、優衣は快諾してくれた。



「ま、これくらいあれば十分かな」

俺の目の前には山ほど、というわけではないが、この島に生えている果実が積まれていた。

「一杯採ったね。これ、私も少し食べていい？」

「いいぞ。というか、優衣の分も採ったからな。あれだけじゃ足りなかっただろ？」

優衣は一つ食べたただけなのでまだお腹が空いているだろう。

この世界の果実は元の世界の果実より若干小さいので、一つだけじゃ女の子でも物足りないだろう。

「あ、この紫色のやつがさっき優衣が食べたやつで林檎味。で、黄色のやつがブドウで赤いのがパイナップル味だから好きに選べな」

「・・・配色と味がおかしいね」

「うん、それは俺も思った。でもまあ、この三種はどれも好きだから問題ない」

「そうなんだ。それにしても、これとか見たことない果実なのにスイスイ採ってたし、味にも詳しいし・・・もしかして、裕介君って最後の人？」

「お、当たり前。そう、何を隠そうこの俺こそが、この世界を知り尽くした参加者だ」

「へー、そうなんだ。いい人と同盟を組んだな」

「だな。俺としても、こんなに良いやつと組めたのはラッキーだ」

優衣は今時の女子高生には珍しいくらいに純粹だ。そして、正義感もある。こんなに良いやつと組めたのはほんとにラッキーな事だった。

ふと、優衣の方を見ると、その首に何かが下げられていた。

その形に見覚えがあるので、俺は優衣の方へとよって確認する事にした。

「ひゃあ。あ、え、えと、どうしたの？」

「これ――」

優衣の首に下げられているネックレスに手を伸ばそうとすると、突然その手が叩かれた。

「いた！何すんだよ！？」

「何するんだって、それはこっちの台詞だよ！裕介君こそ、いきなりそういう事するのはどうかと思うよ！」

「何を言ってる・・・」

そう言って優衣が下げているネックレス（の先端にある細長のクリスタル）を見た。

そのクリスタルは俺のと同じ形をしていた。（だから俺も確認しようとしたのだが）

それ自体には特に問題は無かった。（いやまあ、俺のと似てるっていう問題があるんだが・・・）

——問題は、その背景にあった。

クリスタルの背景は——谷だった。

いや、うん。現実逃避はやめようか。そう、このネックレス、自分の胸辺りまでの長さなのだ。

ま、要は、クリスタルを手に取りようとした俺は、端から見れば女性の胸に白昼堂々手を伸ばしている変態なわけで——

こんな時、俺が取れる選択肢は一つしかなかった。

「すみませんでした！！」



「もう、誤解だっていうのは分かったけど、もう少し考えてよ」

「仰るとおりで」

あれから、全力で土下座した後、必死に誤解を解いたお陰でなんとか事なきを得た。

しかし、俺は自戒の意を込めて正座をしている。かれこれ10分くらいやっているのもうそろそろ足がキツイ。

「で、裕介君が自分のと似てるからっていう理由で手を伸ばしたっていうのは分かったけどさ——最初に説明されたでしょ？」

「え？説明？」

全くの初耳である。

「え？裕介君、説明聞いてないの？でも、あれは参加者全員にあつたはずなんだけど・・・」

「あ、もしかして昨日のやつか？だったら、俺も聞いているぞ」

「昨日のやつは違うんだよ。いや、まあ違くは無いんだけどさ。とにかく、今日ここに来た時、開始の合図の前に説明があつたんだよ」

「え、何それ。初耳なんだけど・・・」

「・・・どうやら、本当に知らないみたいだね。信じ難い事だけど・・・」

「すみません」

「まあいいよ。でもさ、だとしても何で聞いてないんだろ？裕介君、私と会う前に何かやってた？」

そう言われて記憶を探してみるも、これといって何もやってない。

「いや、何もやってないはずなんだが・・・」

「おかしいな。だとしたら聞けるはずなんだけど」

そう言って考え込む優衣。

その時俺は、今までの優衣の言動などである推測をたてた。

「なあ、優衣。もしかしたら俺、分かったかも」

そう言うのと、優衣は首が千切れるのではないかという勢いでこちらを向いた。

「え？何？どういう事？何で？」

「待て待て待て。とりあえず落ち着け。落ち着いて俺の質問に答えてくれ」

俺が待ったを掛けると、優衣は自分を落ち着かせるため2、3度深



呼吸をした。

・・・どうでもいいけど、行動が分かりやすいな。コイツ。

「で、質問って何？」

「ああ。その説明ってのは、俺と出会うどれくらい前にあった？」

「ええと、裕介君とあったのがアレだから・・・」

「——30分くらい前かな」

「なるほどね」

どうやら謎は解けたようだな。

俺が納得したような顔を見ると、優衣がこちらを恨めしそうに見てきた。

「ううー。一人だけ理解しないで私にも教えてよ。幸せっていうのは分かち合った方がいいんだよ？」

・・・幸せな事なのか？これって。

そう心の中で一応ツツコミをいれ、俺は優衣に向かって言い放った。

「ああ、説明を聞いてない理由だけ——」

「——寝てたわ、その時間」

## 第十一話 早起きは三文の得（後書き）

こんにちは、アオです。

今回何をミスったのかというと、お気付きの方もいるかもしれませんが、**んが**、同盟を組む描写が何か軽い事です。

初っ端4行でいきなり結ばせましたからね！自分。あれだけ重要そうにさせながらこの軽さ、これは偏に自分の技量不足です。こんな事になるなら前話で結ばせときゃよかった・・・。

やっぱり変に意地を張るのは良くないですね。初心者とか技量が無い人は特に・・・。

あと、いい加減前書きと後書きがウザイと感じた方は飛ばしてください。さって構いません。ここで重要なお知らせなんてそんなに無いので、サラッと読んで特に何も無ければ問題無いです。

あと一話ほどで説明回は終わりますので、つまらないと感じている方はもう少しだけご辛抱ください。

それでは。

## 第十二話 優衣先生の説明会（前書き）

お久しぶり？です。

作者は風邪を引いてしまい、4日ほどダウンしてました。

でも、いつもは一週間以上はダウンしてるので、今回は結構早くに治った方です。

皆様も、季節の変わり目で体調を崩しやすい時期ですので、お気を付けください。

## 第十二話 優衣先生の説明会

「——え、寝てた？」

「うん、寝てた」

黙りこくる優衣。

すると、突然大声を出してきた。

「ちょ、ちょっと、寝てたってどういう事！？ふざけてるの！？  
え、だって、開始前後に参加者は起きるって前日の説明でもあったでしょ？」

「あるにはあったけど、現実にかくやって俺は説明中の意識が無い。  
寝てたっていうの以外で考えられるのは、誰かしらの能力で意識を無くしてたっていうのだから——」

「そう、それ。きっとそれだよ」

俺が言い終わる前に肯定する優衣。

——まあ、気持ちは分からんでもないけど現実を見て欲しい。

「それはないな。」

何故なら、そのままにしておく理由——即ち目の前でぐーすか寝てる参加者を襲わないわけが無いという事と、そもそもとして、短時間で俺の居場所が特定できるわけが無いという事だ」

「それは、そうだけど——」

「それにだ。大前提で、相手の意識を失わせたらその相手はゲームオーバーになるじゃないか」

「うう」

「つーわけで、俺は説明中はずっと寝てたというわけだ。ドゥーユーアンダスタン？」

「おー、いえす。」

「・・・っじゃくて、何で寝てたのに偉そうなの?!」

「俺はいつでも胸張って生きてるからな。後悔はしない性質だ」

「時と場合を弁えてよ!あと、後悔はしなくても反省はして!!」

「遅刻指導でいつも反省文を書いてる俺に対する挑戦状か? いいだろう、受けて立つ!!」

「だから、偉そうに言わないで!寝坊しないようにちゃんと睡眠を取ってよ!だから説明聞き逃しちゃうんでしょ!」

「お、こりゃ一本取られたな」

「・・・・・・」

「すみません冗談です。以後、嚴重に慎重に気を付けさせて頂きま  
す」

優衣がとてつもなく黒いオーラを発したので、慌てて頭を下げた。

「とりあえず、だ。俺が寝ていた間にあった説明会についての内容を教えてくれないか？」

「あ、うん、そうだね」

そこで優衣はコホンと咳払いをした。

「えっと、大雑把に分けると、私達参加者がつけているネックレスの説明、この戦いについての説明、あとはちょっとした事の説明かな」

優衣がこちらに視線を向けてきたので、俺は先を促すように優衣を見た。

「ネックレスの説明なんだけど、名前はクリスタルっていうらしいの。で、このクリスタルにはいろいろと機能があって、一つ目が“浄化”。これは、クリスタルに魔力を籠めると、体や服とかに付いてる汚れとかを落としてくれる能力。着替えとかが無い世界だから、この機能はとっても役立つと思う」

まあ、優衣も女の子だしな。

風呂とかに入れずに何日間そのままいるのは辛いものがあるだろう。

「で、二つ目が“通信”。これは、神様達が緊急で伝えたい事とかがあった時に使われる機能で、私達には使えないから、頭の片隅に置く程度でいいと思う。あ、あと今回の説明もクリスタルの通信機

能を使って行われたんだ」

なるほど。緊急連絡なんてのはそうそうあるもんじゃないから、この戦いでもあまり使われないであろう機能だな。確かに頭の片隅に置いていても大丈夫な情報だな。

「三つ目——これが結構重要な事なんだけど、クリスタルは自分で外す事は出来ないんだけど、外すと強制的に意識を失ってリタイアになっちゃうの」

「ほう——」

「だから、相手の意識を失わせるのには物理的に気絶させるか、魔力を枯渇させる、若しくはクリスタルを外すっていうやり方があるんだよね」

「なるほどねえ」

これはかなり重要な情報だな。

「あ、でも付け加えると、クリスタルにはあらゆる能力は効果が無いから。何らかの能力で外されたりする心配も無いよ」

俺が頷くと、優衣はそれで、と続けた。

「あとは、“発光”。これは半径50m以内で能力が使われたときにクリスタルが淡く光る機能だね。因みに、自分が能力を使った時にも光るから」

と、ここで優衣は一旦説明を切り上げた。

「まあ、クリスタルについてはこんな所」

何か質問は？と視線で聞いてきたので、俺は首を振った。

「じゃあ次、この戦いについての説明なんだけど……。この戦いには、時間制限があるんだけど、それについての説明は無かった。何でも、直前あたりで発表するんだってさ」

理由は分からないけど、と優衣は続けた。

「他は、この戦いでリタイアした場合は精神体が元の軀に戻るんだって。勝者についての説明も一切無し。それまで通りの生活に戻るって」

ん？なんか今、よく分からん言葉が聞こえたな。

「精神体？なんだそれ？」

「え？ええと、参加者は全員、肉体から切り離された精神体の状態なんだ。だから、今の私達の肉体は今頃向こうじゃ昏睡状態だと思う。それで、戦いに負けた人の精神は肉体に戻されて今までの生活に戻るってわけ」

これはエントリーする時の説明にもあったはずだけど、と優衣がこちらを見てきたので曖昧な笑みで誤魔化した。

——あのおっさん、次会ったらただじゃおかねえ……

「悪いな。それじゃあ続きを頼む」



「え？あ、ええと。説明はこれでお終い。あとは支給された食料についてと、この世界についての最低限の説明だから」

「そうか、ありがとう」

ふむ、これで大体の情報は出揃った。

けど、優衣の説明であるはずのものを俺は持っていない。

「なあ、食料の支給って、参加者全員にされたのか？」

「うん。多分そのはず。私も起きた時に近くに落ちてたのを拾った感じだから」

「実はさ、俺、その荷物を置いてきちゃったみたいなんだよ。必要になるかもしれないから取りに行かないか？」

「うん。そうだね。私も自分の荷物を無くしちゃったし。実はアレ、中には食料以外にも入ってたんだよね」

「そうなのか？」

「うん。なんか色々あって、よく覚えてないけど、何だかサバイバルって感じの中身だった」

「そうか。なら尚の事俺の荷物は取りに行ったほうがいいな」

「うん。じゃあいこう」

「ああ」

そうして俺達は忘れてしまった荷物を取りに行くことにした。

この後起こるであろう当然の結果について、あまり深く考えずに――

## 第十二話 優衣先生の説明会（後書き）

こんにちは、アオです。

ようやくと説明回の終わりです。

次回から動かす予定です。

いやー、ここまで来るのにえっらい時間が掛かりました。

自分は風邪を引いて何日間か投稿をお休みしたので結構時間が掛かった感じです。

本当は昨日か昨日に投稿をしたかったのですが、申し訳ありません。

体調管理には気を付けたいと思います。

あと、今回の話は、前半部分を風邪引く前に書いてたので、前半と中盤から後半にかけてまでの雰囲気若干異なっている可能性があります。

長くなっていますが、まだ続きます。

えー、今日から投稿を一時休止したいと思います。

理由は簡単。

・・・テストが近いんです。

取り合えず、テストが終わったらまた投稿を再開したいと思いますので、それまでよろしくお願いします。

それでは。

### 第十三話 炎の襲撃（前書き）

こんにちは、アオです。

皆様、お久しぶりです。ようやくテストが終わったので投稿出来ました。

え、出来はどうだった？

finishでendですよ。もういろいろと終わりましたよ。

ちよつと今回は点数が低すぎたので、次のテストではもう少し前から休むかもしれません。

今回は戦闘描写が入ります。

やっとなつぽくなってきた『超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！』をこれからどうぞよろしくお願いします。

### 第十三話 炎の襲撃

「お、あったあった」

俺が優衣を連れて目覚めた場所で支給物を探す事数分、目的のものを見つける事が出来た。

「中に何が入ってるの」

「いや、お前にも渡されたらろ・・・」

「確かに渡されたけど、しっかり見てないから」

「そうですか・・・」

という事で、俺が優衣にも見えるように袋を広げると、優衣が覗き込んできた。

「えーと、ナイフにロープにマッチと・・・なるほど、確かにサバイバルな感じのする内容だな」

「でしょ。」

「ってあれ、何で新聞紙なんて入ってるんだろ？」

優衣が袋から取り出したのは、特に何の変哲も無い新聞紙だった。

「ああ、多分それは火種だろう。それで火を付けろって事だろうな」

「へー、なるほど。それにしても、よく火種だって分かったね」

「一応言っておくけど、これが正解だという保証はないぞ？ただ、中に入ってるものをみて多少の考察をただけだ」

「それでも。普通だったら先ず新聞紙が入ってる事で頭をこんがらせるよ」

「まあ、一応ボーイスカウトをやってたからな」

「あ、そうなんだ」

といっても、もう過去の話なんだが。

中学まではやっていたんだが、高校に入ってから時間は時間も余り取れず、辞める形になってしまった。

辞める時に、少数の人が送別会を開いてくれて、その時若干目頭が熱くなったが耐え切ったのを覚えている。

と、そこまで思考をしていると、急に背筋に寒気が走った。

——後ろか！

咄嗟に俺は優衣を巻き込む形で地に伏せ、迫り来る脅威から逃れる事が出来た。

そして、脅威<sup>それ</sup>を見たとき、俺は言葉を失った。

————赤。

俺達の頭上には、炎が疾<sup>はし</sup>っていた。

「チッ、外したか」

近くから忌々しげな声が響く。

どうやら、その声の主が先の炎の原因のようだ。

「な、何々？何があったの！？」

俺の腕の中にいる優衣は状況に頭がついてこないのか、軽くパニツクに陥っていた。

しかし、今のこの状況において、それは命取りとなる。俺は急いで優衣に状況を説明した。

「優衣、敵だ。さっきの炎もそいつがやった」

「え、敵？」

俺の言葉で多少の冷静さを取り戻したのか、落ち着きを見せ始めた。

「優衣、ここは危険だ。一先ず逃げるぞ」

俺は急いで優衣を立ち上がらせた。

「おおっと。逃がすか、よ！！」

その言葉が放たれると同時に、またも疾<sup>はし</sup>ってくる炎。俺はその動きを目に捉えて能力を発動させた。

「視覚操作、制限」  
リミット

——目の前の空間を指定。

瞬間、それ以外は視界に写らなくなる。

「——空間停止」  
フリーズ

——指定した空間を止める。

炎は動きを止めて、俺の目の前で止まった。

「な!?!」

相手はその光景に驚き、それが隙となる。

俺は優衣の手を握って最低限の警戒をしながら逃走を試みた。

「舐、めんなああ!!」

相手は目の前で逃げ去ろうとする俺達に能力を発動させた。

「ぐ、——空間停止!」  
フリーズ

先程と同じ方法で炎を止めたが、今回の攻撃は更に苛烈だった。

グオオオオオ!!

目の前で止まった炎は、四つに分かれて四方から襲い掛かってきた。



チッ

心の中で舌打ち。これが出来たのは余裕からか、本当にそう思ったのかは分からないが、俺はいきなり窮地に立たされた。

俺の能力、【停止】は、俺の視界に移るものを止める能力なので、こういう他方からの攻撃にはかなり弱い。

相手はそんな俺の能力事情を知らないだろうが、その攻撃は効果が高かった。

「——っ、<sup>フリーズ</sup>空間停止、<sup>ロール</sup>回転」

視覚操作を使い、俺の視界を操作、俺が向いた方向の炎が順番に動きを止めていった。

——しかし、今回の攻撃は先程言ったように更に苛烈だった。

「うらああああ!!」

「——ぐっ!」

相手が更に魔力を籠めた事により、炎の力が強まり、俺の能力を超えようとしてくる。

俺も更に魔力を籠めて応戦したが、相手のほうが強かった。

グオ!

俺が最初に止めた炎が俺の能力を突き破り、こちらに迫ってくる。

俺は避ける事も出来ないまま、その炎に身を包まれるしかなかった。

### 第十三話 炎の襲撃（後書き）

突然の襲撃。

迫り来る炎。

さてさて、裕介はどうなってしまうのか!?

と、いうのは置いときまして、今回の裕介の能力には贅沢にもルビ振りがされています。

一応、他の能力にもやるつもりですが、何かこれやると厨二臭が加速するような・・・。

あ、今回出てきた炎能力者にもルビは振ります。ご安心を。

それでは。

## 第十四話 逃走（前書き）

今回のサブタイトルは、決死の覚悟でつけました。

何故そこまでの覚悟が必要なのかというと、もう一度使うような話  
が出来るかもしれないからです。

ぶっちゃけ、いつか同じタイトルつける事になるんじゃないのかな  
と危惧したわけです。

そんな感じで手探り状態で進みますが、よろしくお願いします。

## 第十四話 逃走

「ダメー！ー！！」

俺が炎に包まれようとした時、優衣が突然叫びだした。

優衣は、懷から何か薄いカードみたいなものを取り出し、炎に向かって投げた。

「騎士は戦場にて散る！」  
フアイア

すると、カードが突然爆発を起こし、迫り来る炎を吹き飛ばした。

俺も爆発の余波を受けたが、炎に身を包まれるよりは軽傷で済んだので、直ぐに体勢を立て直す。

「優衣、助かった。逃げるぞ！」

俺は、優衣の手を握ってこの場からの逃走を試みた。

幸い、相手は二度の反撃に多少驚いているので、例えば数秒間だけの隙だろうとこれを逃す手は無かった。

しかし、ここで問題があった。

「ま、って。——きゃっ」

俺の速度についてこられなくなった優衣が転んだのだ。

「くっ！」

優衣が転んだ事により、自然、手を引いていた俺も体勢を崩す形となった。

「い、ごめん」

「謝るのは後だ！今は早く逃げるぞ！！」

こんな何の遮蔽物も無い場所では、相手に秒殺されてしまう。

今まで無事だったのは、偏に運の要素が大きいだろう。

「待てやああ！！」

相手も逃げる俺達を追いかけて来るが、今まで逃げ続けたお陰で距離は50mはある。相手がここに来るまであと最低でも8秒は掛かるだろう。

————しかし、そんな距離による常識も、この戦いにおいては意味を成さなかった。

「フレイムロード  
炎の一本道」

「くっ」

相手の能力の炎が、またもやこちらに向かってきた。

「優衣、もう大丈夫だな！？走るぞ！」

すぐさま起き上がった俺達は、その炎から逃げるべく、炎に背をむけて本気で逃げる姿勢をとった。

「行くぞ！優衣！」

優衣の手を取り、走り出そうとするが、中々優衣が動き出さない。

「おい！何してるんだよ！」

炎は俺達との距離をどんどん縮めていってるので、つい怒鳴り声になってしまう。

「いいの。私を置いて逃げて」

「何言ってるんだ、お前は！！！」

優衣は全く動こうとしないので、俺はこれでは埒が明かないと思い優衣を抱き上げた。

「ちょ、ちょっと？！裕介君！！？」

「うるさい！黙ってないと舌を噛むぞ！」

優衣を抱き上げた俺は、後ろまで迫っていた炎を間一髪で躲すことに成功した。

「裕介君、降ろして！私と一緒にじゃられちゃうよ！」

「うるさい！！！」

優衣が変な事を言い出したので、俺は怒鳴りつけて黙らせた。

どうやら優衣は、先程転んでしまった事を気に病んでるようだった。

「いいか、俺は同盟を結んだ相手を、見捨てたりなんてしない。だってそうだろ。お互い助け合うための同盟なんだ。なら、優衣がやばくなったら助けるのが当たり前だろ！！」

言い終わり、すっきりした俺は後ろから来る炎から逃げる。

しかし——優衣を抱き上げた事により、さっきよりは動きは速くなって若干引き離す事が出来たが——準備運動も助走も何もしてない状態でのいきなりの全力疾走なので、直に遅くなっていくだろう。

——そして、その時は思っていたより早く訪れた。

「ぐあー！！」

炎が俺の背中を舐めた事により、俺の背中が焼け、その痛みで一瞬動きを止めてしまった。

ゴウ！

敵は俺とほぼ同じ速度だったのか、距離は相変わらず50mは開いているが、炎との距離はキス3秒前くらいの距離になっていた。

——ここまで、か。

せめて俺の腕の中にいる優衣だけでも守ろうと、優衣を強く抱く。



すると、俺の腕の中にいた優衣が、もぞもぞと動き出した。

「魔を払いし護符！」  
ペンタクル

またも優衣が炎に向けてカードを投げると、カードが盾の形状を成し、炎から守ってくれた。

「優衣——」

俺が優衣を見ると、優衣は申し訳なさそうな顔をして——

「さっきはごめんね。変な事言って。

——私も、裕介君を守るよ」

そう言い終わると、優衣は俺の腕の中から出た。

「さ、早くいこ。逃げるんでしょ？」

「は、さっきまでもたついてた奴が何言ってるんだか」

俺が軽口を叩くと、優衣は膨れた面になった。

「もう、そんな事言ってる助けてあげないよ？」

「——おっと、どうやら暢気に話してる場合じゃないみたいだな」  
後ろを見ると、敵はもう距離を詰めて俺達の近くまでやってきていた。

「はあ、はあ、はあ、どうした、もう逃げるのは諦めたか？」

「いや、まだ諦めてはいないな」

俺は「それに、」と付け加える

「諦めてないって言ったら見逃してくれるのかよ？

息も切れてるみたいだし、俺としては見逃してくれるとありがたいんだけどな」

チラリと優衣を見ると、優衣はこくんと頷いた。

「行くぞ優衣！！」

優衣の手を握り、もう一度逃走。

しかし、相手の目の前で背を向けるなど、狙ってくれと言ってるようなものだ。

当然、敵も俺達に攻撃してきた。

「炎の一本道」  
フレイムロード

すぐさま俺達へと襲い掛かって来る炎、それを――

「魔を払いし護符！」  
ペンタクル

優衣が守り、俺達は一気に距離を引き離す。

「逃がすか！」

敵も追ってくるが、先程の間で多少の落ち着きを取り戻した俺は、能力を発動させた。

「フリーズ空間停止」

狙いは相手の足元。

優衣に使ったのと同じ手段を用いて相手を転ばす事に成功した。

「ぐあ！」

「暫くそこで大人しくしている

———フリーズ物体停止」

今度は相手自体に能力を発動する。

俺の能力は、本来の力の10分の1まで低下しているので、完璧に動きを止める事は出来ないが、鈍らせる事は出来る。

相手は突然感じる体の異変に戸惑い、俺達はその間に逃走を図る。

今なら倒せるかもしれないが、相手の能力はおそらく視界に写った場所に炎を疾らせる能力なので、接近は難しい。

倒すとしても、ちゃんと対策を練ってからだ。

—————そうして今度こそ俺達は逃げる事に成功した。

## 第十四話 逃走（後書き）

こんにちは、アオです。

ようやくバトルものみたくなってきました（と言っても、主人公は逃げてるだけです）。

ここまで来るのに一ヶ月、・・・どれだけ時間をかけてるんだろう。でもこれからは飛ばしていくつもりなので、今までより楽しめると思います。↑珍しく自身あり気。

それでは。

## 第十五話 相互確認（前書き）

こんにちは、アオです。

まさかの約一週間ぶり投稿となっていました。

自分としては、最低でも一週間に一度は投稿しようと思っているので、そこら辺は安心してください。

ただ、困った事にパソコンを使える時間があまり取れません。

自分は、どうしたら・・・

尚、今回の話は第十三話より前の話となります。

（今回は遅れてしまったお詫びとしていつもより多少長めの話です。  
お楽しみ頂けたら幸いです）

## 第十五話 相互確認

——時を遡ること数十分前

俺達が荷物を取りに行っている道中、優衣が思い出したように尋ねてきた。

「ところでさあ、裕介君の能力って何なの？」

「ん？いきなりどうしたんだ？」

「いや、いきなりって言われてもさ。

——私達、同盟組んだのにお互いの能力知らないでしょ？」

「いやまあ、そうだけど…」

優衣の言いたい事は分かる。

だけど、その聞き方は余りにもストレートすぎるのではないかと。

「はあ、優衣。お前もう少し警戒しような。いくら同盟を組んだといっても、能力教えてって聞くのは流石にストレートすぎやしないか」

「あ、そう言われてみれば確かにそうだね」

そこで、優衣は「でも」と付け加える。

「何でか分からないんだけど、裕介君なら大丈夫だって、そう思え

るんだよね」

「阿呆。そんな勘を信用するな」

「でも、そういう事を言うって事はさ、裕介君は私に信じて欲しくないの？」

コイツ、屁理屈を・・・。

「そうじゃない。確かに信用はして欲しいが、俺が言ってるのはそういう事じゃなくて、最初に言ったようにもう少し警戒心を持って欲しいって事だ」

俺がそう軽く説教をすると、優衣は頬を若干膨らませた。

「むう、そんな事は分かってるよ。もう少し信じてくれてもいいのに・・・」

俺は色々ツツコミたい衝動を抑えて、優衣に話しかけた。

「まあ、安心しろ。俺はお前が何かしない限り裏切ったりはしない。だからまあ、俺の前だけでは頭のネジを緩ませてもいいぞ」

「ゆるませてって、——ヒドッ！」

「冗談だ」

俺は何か言ってくる優衣を適当にあしらいながら、目覚めた場所へと進んでいった。

「もう、意地悪言わないで教えてよ」

「まあ、そうした方がいいかな」

これからの連携とかのためにもお互いの能力については知っておく必要がある。

後は、優衣の能力がどれだけ使えるかって所だろうな。

「じゃあ優衣の希望通り俺の能力について説明しよう」

俺がそう言うと、優衣はぐっと表情を引き締めた。

しかし——別に優衣のこういう素直な所は嫌いじゃなく、寧ろ好きなんだけど——俺の能力はそこまで大層なものじゃないのでもう少し崩して貰いたいのが本音である。

「優衣、俺の能力って結構微妙だからあんまり変な期待はするなよ」

一応釘を刺しておく。

が、しかし——

「大丈夫だよ。ほら教えて」

お願いします。そんな気体に満ちた目で見ないでください。俺の能力は本当に微妙なんです。

息を吸い、優衣を見ながら俺は話し出した。



「俺の能力名は“停止”

能力は？自分が視認しているものの動きを止めることが出来る？能力だ」

「え、何それ、凄いじゃん」

一気に興奮する優衣。

ああ、過去（といっても一週間前だけ）の自分の姿を見ているようだ。

あの時の俺は、こんな感じで喜んでたのかな…。

「待ってくれ。実はこの能力には落とし穴があつてな。この能力、本来の力を発揮できないんだ」

「え、何で？」

くうう、凄く言いたくない。でも、言うしかない！

「・・・その、どうやら俺の器が小さかったらしく、能力もスケールダウンしたんだ。具体的に言うと、本来の力の10分の1まで下がった」

「え？」

一気に驚きと困惑とその他諸々を含めた表情となる優衣。

どうでもいいけど器用な事だな。

「え、と。因みに、どうやって私を転ばせたの？」

「ああ、それは簡単。暢気に歩いている優衣の足元の空間を止めて、それに足を引っ掛けさせた」

「ああ、なるほど・・・」

優衣は思案顔となり何かを考えていたようだが（といっても、俺の能力についてだろうけど）、急に頷いたかと思うところらに向き直ってきた。

「大丈夫。裕介君は最後の参加者だからこの土地について詳しいわけだし、大丈夫だよ」

あの一、それって俺の能力より土地勘の方が重要って言ってます？

・・・分かってた事だけど、やっぱり辛いぜ。

とりあえず俺の補助能力についての説明もして、次は優衣の番となった。

「じゃあ、次は私の能力についてだね。・・・裕介君の能力について散々言っただけど、私のもちっと微妙なんだよね」

ほう、それは楽しみだ。先程の仕返し、たっぷりとさせてもらおうか。

「私の能力なんだけど、能力名は“切り札トランプ”」

——能力は、トランプの絵柄によって違うんだよね」

「絵柄、つまりはスートで能力が違うのか」

「へえ、トランプの絵柄の事ってスートって言うんだ。——って、そうじゃなくて・・・」

私の能力なんだけど、スペードの能力名は騎士ファイアは戦場にて散る。能力は、トランプを爆発させて相手を攻撃する能力。次にダイヤのカードの能力名は魔ペンタクルを払いし護符。能力はトランプが盾となって相手の攻撃を防ぐの」

え、さっきから黙って聞いていれば何この能力。

メチャクチャ凄いですけど。

「ちよい待て。凄くないかその能力」

「あー、うん。確かに凄いんだけどね・・・」

なんか歯切れが良くないな。

俺が理由を考えている間に、優衣は各スートの能力説明を続けて、それが終わった頃に俺はある一つの可能性さきもんに思い至った。

「なあ、疑問に思ったんだけどさ、——その能力ってもしかして消耗品？」

「うっ」

——どうやら凶星だったようだ。

しかし、となると確かにアレだな。

俺の能力よりは使えるけど———というか殆ど最優ともいえる能力だが———まさか消耗品というちょっと現実的な面があるとは。

———もしかして、この戦いに参加してるやつらの能力も皆似たようなもんか？

と、そんな思考は置いといて、これからの事について考えないとな。

「優衣の能力が消耗品なのは分かった。つーわけでこれからの方針なんだけど、敵と会ったら戦わずにまず逃げて、それから態勢を立て直した所で戦闘としようか」

戦闘、という言葉にびくりと反応を示す優衣。

「優衣———」

優衣は微かに震えていた。

無理も無いだろう、今までの日常からいきなり戦場に放り込まれたんだ。

寧ろこれが普通の反応で、俺だって緊張していないわけじゃない。

緊張していないわけではなく、寧ろ優衣と一緒に震えたい所なんだが———

「大丈夫———」

俺を気遣ってか、気丈なことを言う優衣。

——震えている女子を目の前にしてどうして男である俺が情けない事を言えるのだろうか。

俺がこうして平気な振りをしているのは優衣のお陰であり、俺も優衣を元気付けなくてはならない。

「優衣、大丈夫だ安心しろ。

——俺が、守ってやるから」

しっかりと、そして優衣にちゃんと届くような声で言う。

すると、震えていた優衣はこちらを見上げてきて——

「もう、くさい台詞言わないでよ」

「そうか、悪かったな」

優衣が元気を取り戻した所で、目的地は直ぐそこ、という所まで来ていた。

俺は、さっきの言葉を示すように優衣の手を握った。

「ほら、あともう少しだ。さっさと見つけちまおう」

その言葉に優衣は——

「うん！」

元気に頷く事が出来た。

☆おまけ小話☆

裕介が能力説明を終えて、優衣が裕介をからかったキツニー一言

「ねえ、裕介君知ってる？」

「何をだ？」

「器が小さい男ってもてないんだよ」

「うるせえー！ー！ー！！！」

## 第十五話 相互確認（後書き）

今回、最後に自分は己の欲望を満たすために妙な事をやっちゃいました。

はい、例のシリアス？モードを完璧にぶち壊してくれたおまけ小話と没小ネタです。

これは前回（第十話）でもやりましたが、説明をしていなかったのでもう一度ここでしたいと思います。

### ・おまけ小話

本編で文章の構成とか諸々の都合上カットされてしまったお話。（主にギャグ）

### ・没小ネタ

本編を多少弄ってギャグに主体を置いたネタ。（シリアスの部分によく出てくる。全面的にギャグ）

ま、こんなところですかね。

これまでの空気を壊したくないという方は、読まなくても全く問題ない仕様となっておりますので、そういう方はご遠慮ください。

それでは。

## 第十六話 疑問（前書き）

こんにちは、アオです。

前回これから面白くなる発言をしました、今回は割りと地味目です。

と、いいですか、これから少しの間は戦闘はありません。

ですが、戦闘以外でも面白く書けるよう頑張りますので応援よろしくお願いします。

あと、今回は割りとどうでもいいけど重要な事でご都合主義が入りますので、ご容赦ください。



## 第十六話 疑問

「ここまで来れば大丈夫だろう」

俺達はアイツから逃げ切り、今は？海？エリアにいる。

この世界は、前にも言ったが6つのエリアに分かれていてる。

各エリアの配置は、五角形の形を思い浮かべてもらおうと分かりやすいと思う。

？森？エリアの右隣には？砂漠？エリア、その隣には？水源？、？海？、？平原？と繋がっていて、中央に？民家？エリアが入る。

俺達は？平原？エリアからここまで逃げてきた。

ここは最初から拠点にしようと思っていた場所なので、色々和好都合だった。

「ほら、裕介君、こっち来て。今から治療するから」

優衣はこっちへ来いと手招きをしている。

炎が俺の背中を軽くだが焼いたので、それを能力で治してくれるとのことだ。

「じゃあ後ろ向いて。——これなら“3”で十分かな・・・。  
——傷を癒す聖なる光<sup>ヒール</sup>」

優衣がそう言って手に持っているトランプを俺の傷に当てると、たちまち痛みは消えた。

「ありがとう。それにしても、本当に便利な能力だな」

優衣の能力は“トランプ”で、各絵柄<sup>スート</sup>によって能力が違い、更に記載されている数字によっても能力の強さが変わるといいう、俺とは違って大変優れた能力である。

「どういたしまして。あ、燃えちゃった衣服はどうしようか？」

俺の服は背中部分が焼けてしまい、なんともみすばらしい風である。

しかし、服についてはちょっとした考えがあった。

「ああ、その事なんだけど。

——うまくいくな」

俺は首にかけられたクリスタルに魔力を籠めると、クリスタルは淡く光だしてから光が俺の体を一瞬包み、すぐに消えた。

「え、なにどうしたの？」

「クリスタルの能力を使ったんだど——どうやら成功したみたいだな。

ほら、背中を見てみるよ」

そう言って背中を向けると、優衣が驚いた声を出した。

「うそ。穴がふさがってる」

「だろう」

俺は一人納得していると、優衣がこちらを見つめていた。

「もう、一人で納得しないでこれがどういう事か説明してよ」

「分かった分かった。これは推測だったんだが、優衣がこのクリスタルの一つ目の機能、“浄化”の説明の時に、着替えが無いからこの能力は役立つとか言ってたろ」

「ええと、言ったっけ？」

「・・・まあ、言ったという事で話を進めるけど、服が焼けて駄目になった時にふと思ったんだよ」

「何て？」

「戦いで衣服が駄目になるのは当たり前だろ。何せ、これは少年漫画じゃないんだからズボンだけが残る、見たいな事にはならない。だろ？」

「うん、確かにあのズボンは不思議だね。なんで破けたりとかしないんだろ？」

「・・・いや、そこかよ」

「え？」

「いや、いいよ。説明を続けるぞ。

それで思いついたのが、クリスタルにある“浄化”機能。衣服が破けたりするのになんで汚れしか落とさないんだと疑問に思ったんだ」

「あ、確かに」

「で、とりあえず試しにやってみたらこれがうまくいったという訳だ」

「へー、なるほど」

「しかしそうすると、この戦いって結構至れり尽くせりだよな」

「え？」

「だってそうだろ。ちゃんと食べ物はあるし、衣類だって一瞬で綺麗に出来る。更には雨風を凌げる場所だってある。ほら、衣・食・住の全部がそろってるだろ」

「言われてみれば確かに・・・」

「一体神は、何がしたいんだ・・・？」

「え——」

「俺が神に、何故こんな戦いをするのかと聞いた時、娯楽のためだと返答された。仮にその言葉が本当だとして、こんな恵まれた状態での戦いなんて、見てて楽しいものなのか」

「それ、は——」

「まあ、こんな事を今考えても仕方が無いな。今考えるべきことは、あの炎のやつの対抗策だな」

「——うん、そうだね」

——その時の俺は気付かなかった。優衣の顔が哀しく、しかし決意を湛えた表情であった事を——

【side—優衣】

——疑問に思い始めた。

それは、私が思っていたよりも早かった。

いや、もしかしたら、最初から疑問に思っていたのだろうか。

今までの行動、言動からして、裕介君はかなり鋭い思考をしている。きつと、今私が考えているより早くに、この戦いの意味を知る事になるんだろう。

それは——私の参加理由であり、神様の願いであり、絶対に認めてはならないこと。

裕介君に教えれば、力を貸してくれるかもしれない。

けれど、まだ完全には信用し切れない。

だけど、私の心の奥で、裕介君を信じたいという気持ちがある。

なぜかは分からない。だけど、最初に会った時から、この人なら信じる事が出来ると思えた。

だから、同盟を持ちかけられた時もあんなに簡単に承諾できた。

信じたいけど、簡単に信用してはいけないジレンマ。

——私は、一体どうすればいいの——？

## 第十六話 疑問（後書き）

今回、クリスタルに新たな能力をご都合主義でつけてしまいました。自分としても、クリスタルで服も直せるような文章を書いたと思います。込み、後から見直してみるとさあ大変。

？やばい！服が直せるみたいな事を匂わせてすらいらない！？

という感じで二次創作の伝家の宝刀『ご都合主義』を発動してしまいました。

こういう事が以後無いように気をつけます。

それでは。

## 第十七話 名付け（前書き）

今回は優衣視点の内容となります。

うまい区切りが無かったので、今回は（最近の文章量よりは）若干短めです。



## 第十七話 名付け

「さて、アイツとの戦闘に備えて対策を——」

と言ったところで裕介君は言葉を一旦切ったので、私はそれについて尋ねてみた。

「どうしたの、裕介君？」

「いや、いつまでもアイツとかって呼んでたら分かりづらいなあって」

「それは、確かにそうだね」

どうやら裕介君は、あの炎の人の呼び名がない事で悩んでいたらしい。

「うーん、一応、こっちで適当に呼び名を考えておくか」

一聞するとどうでもいい事だけど、これから先——他にあと4人と出会うというのに——いつまでもアイツとかだと分かりづらい。なので、この相手の呼び名を考えるのは賛成だった。

「それじゃあ裕介君、何か良い案ある？」

私が尋ねると、裕介君は一、二分ほど考えてから言ってきた。

「炎」

「――え？」

たっぷり五秒間、溜めに溜めた疑問符をぶつけてみた。

「いや、だからアイツの呼び名。炎でどうだ？」

「・・・数分間悩んだ挙句そうくるの？」

「む、だめか？」

「いや、別に駄目って言うわけじゃないけど、ただ――」

そう、別に駄目って言うわけじゃない。わけじゃないけど、ただ――

「ただ？」

「センス無いなあ、と――」

「ぐっ！」

裕介君は私の言葉に精神的にダメージを受けて、がくりと膝から崩れ落ちた。

「―――でもいいけど、裕介君って結構芸が細かいよな」。

と、本当にそんなどうでも良い事を考えていると、裕介君はいきなり立ち上がり――

「じゃあ優衣、お前何か良い案あるのかよ」

・・・どうやら裕介君の復讐らしい。多分これで変な事を言ったら私が言った以上に言ってくるに違いない。それだけは阻止しないと。

「えーと・・・」

「うん？」

ニヤニヤしながらこちらを見てくる裕介君。

・・・ちよつとカチンときたよー。

「炎道<sup>えんどうぼむら</sup>君なんてどうかかな？」

ほら、と地面に漢字を書いて見せた。

「ぐおっ！苗字を付けるだけじゃだけじゃ飽き足らず、あいつの能力を、遠藤という一般的な苗字に当てはめて、更には妙に小洒落た名前までつけてくるなんて――！！！」

どき、と今度は本当に膝から崩れ落ち、地面に手をついて呆然とする裕介君。

・・・えーと、取り合えず丁寧な解説ありがとう。

「ほら裕介君、元気出して。裕介君の考えた名前と呼ぶから」

そうフォローをすると、裕介君はこちらをキッと睨み――

「なんだよ、同情なんていらねえんだよ。そうやって言って、どう

せ心の中じゃあ『ププツ、なにコイツのセンス。マジありえないんだけどー』とかって思ってるんだろどうせ！」

えーと、一応突っ込んでおくと、そんな事思ってますよ。あと、どうせって二回言ってますよ。

取り合えず裕介君を慰める事数分、ようやく元気を取り戻した裕介君が切り出した。

「よし、それじゃこれからアイツの事は炎道って呼ぶぞ」

うーん、どうやら裕介君の中じゃああれで決定したみたいだ。

私としては、ちょっと変に凝っちゃってるから恥ずかしいんだけどな。

「あの一、それ採用するの？」

「なんだよ。優衣が考えた名前じゃんか。俺のなんかよりずっといいからこれでいいじゃん」

まあ、どうせ私達の会話くらいでしかその名前は出ないんだし、それでいいか。

ともあれ、あの炎の人、改め炎道君の対策会議が始まった。

## 第十七話 名付け（後書き）

こんにちは、アオです。

今回の内容敵に名前を付けるというものでしたが、これが意外に重要だったりします。まあ、皆さんはそんな事を言うまでもなく分かっているでしょうが・・・。

これから先で出会う敵たちに、裕介と優衣は素敵なセンスで名前を付ける事が出来るのか――？

次回、超微妙能力で戦場を駆け抜ける！第十八話、『裕介、優衣に一矢報いる』を請うご期待ください。

嘘です。

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第十八話 対策会議（前書き）

展開が遅いですが、これからもよろしくして頂けると嬉しいです。

## 第十八話 対策会議

「それじゃあ改めて炎道の対策を考えるぞ」

俺がそう切り出すと、優衣の顔が引き締まった。

「まずあいつの能力だが、あいつの能力は十中八九発火能力で間違いないと思う」

「うん、そうだね」

俺の言葉に頷く優衣、俺はそれを確認して続けた。

「あいつの能力は、おそらく視認した空間に炎を疾らせる能力だろうな」

「見た感じだと、炎が炎道君から疾ってる感じだったよね」

「そうだ。そしてそれがアイツの弱点だ。アイツは視認した空間に炎を発生させるわけじゃなくて、あくまで炎を疾らせる能力であるという事が重要だ」

これはつまり、火元である炎道から距離をとればすぐに攻撃される心配は無いという事だ。

炎道と俺の能力は発動条件が同じなため、その弱点も熟知している。

即ち、あいつを倒す策とは――



「遠距離からの死角を狙った攻撃。それがあいつを倒す手段だ」

俺の能力は、真正面での戦いにはとことん不利だ。優衣の能力も、戦う事は出来るが回数制限があるためやはり向かない。

基本、俺達の戦い方は背後からの奇襲となる。

そしてこれからについて話そうとした時、ふとある疑問が浮かんだ。

「ところで優衣。お前、あいつと最初戦った時にカードを三枚使ったろ。何番を使ったんだ？」

俺の言う番号とは、即ちトランプに書いてある数字である。

優衣の能力である“トランプ”は、数字によって能力に差が出る。

上から

$A < K < Q < J < 10 < 9 < 8 < 7 < 6 < 5 < 4 < 3 < 2$

といった具合だ。

一番上位のAにはかなりの力が秘められているそうなのだが、実はこの能力には困った弊害がある。

——即ち、能力の効果が限定数値なのだ。

俺の能力は魔力を籠めればそれだけ停止させる力が強くなるが、優衣の能力はそうはいかない。

消費する魔力量は数字の大きさに比例するが、必要以上の魔力は籠められない。

詰まる所、使った数字以上の能力をぶつけられたら一巻の終わりと  
いう事だ。

そういった意味では実に不便な能力だが、各能力にはそれを補佐する補助能力があり、この能力にも当然ある。

優衣の補助能力とは——“数値化”

目に映るもの、正確には自分が視たいと思った情報を数字に置き換える能力。

これにより、能力の強さを数字に置き換え、それに見合ったカードを使うというのが優衣の常套手段である。

因みに、最初に優衣が俺に言った嘘が分かるという発言は、この能力を使って俺の心拍数を視ていたそうだ。

——話を戻そう。

さっき俺の背中の治療に使った番号は“3”なので、まだ大きいカードは控えている。

「えーと、最初に使ったのが騎士<sup>スピード</sup>は戦場にて散るの“4”で、あともう二枚は魔<sup>ダイヤ</sup>を払いし護符の“3”と“5”だね」

「なるほどね」

初戦でいきなり三枚も消費したのは痛いが、どれも小さい数字だったのでよしとする。

しかし――

「これから先は、カードの消費がかなり激しくなっていくだろうな。無駄な消費は抑えておいた方がいい」

「例えば？」

「取り合えず、相手の攻撃は避けるに越した事は無いが、たとえばたってもそれが軽い怪我だったならカードは使わずに自然治癒力に任せよう」

「うん、分かった」

取り合えず、今後の方針は決まった。

まず、相手を見つけたら逃げの一手で、余裕があれば優衣の補助能力で相手の強さを見ておく。因みに炎道は、こちらが奇襲を受けたため、ちゃんと見る時間がなかったそうだ。

その事に対して優衣は――

「ごめんね。私がしっかり視ておけばもっとしっかり作戦も練れただろうし、それに、弱気な発言なんかもしたりして――」

と、先程の事も含めてけなり落ち込んでいたので、俺は優衣の頭を手を置いた。

「大丈夫だ、気にするな。さっきも言ったが、仲間って言うのは助け合う為にいるんだ。お互いがお互いをフォローするのは当たり前前の事なんだよ」

そう言いながら頭を撫でてやると、優衣は――

「うん、そうだね。裕介君の為にも私、頑張るよ」

「――そうか」

そうして微笑み、頭を撫でていると、途端に優衣は顔を赤くしながら視線を彷徨わせ、手を妙にバタバタ振り、明らかに挙動がおかしくなり始めた。

「優衣、どうかしたのか？」

「そのう、て・・・」

ぼそぼそとした声で喋るので、優衣が何を言っているのかよく聞き取れない。

「え、聞こえないんだけど」

もう一度問いかけると、優衣はさっきよりはっきりとした声で言い直した。

「その――もうそろそろ手、下ろして欲しいな」

「ああ、その事か――」

言われて直ぐに手を引つ込めると、優衣は安堵したような表情となった。

うーん、こういう反応をされると結構心にくるものがあるな。

そしてそんな俺の気持ちを知らず、優衣は優衣で胸に手を当てて深呼吸をしていた。

「さて、炎道の対応策は決まった。取り合えず、ここを移動するぞ」

「え、どうして？」

優衣は心底不思議そうに聞いてきた。

「一応、他のやつも調べておいた方がいいだろ。調査だよ」

「あ、なるほど」

優衣は納得がいったような顔となった。

「理解したか。それじゃあ行こうか」

「うん、でも何処に？」

「そうだな・・・」

取り合えず、喉も渴いたことだし――

「？水源？エリアに行くか」

## 第十八話 対策会議（後書き）

こんにちは、アオです。

今回は優衣の能力説明を更に詳細にした回となっていました。自分としても、もうちょっと見せ場が欲しい所ですが（何せ主人公たちは碌に戦いもせず逃げ出しただけですから）、中々機会が訪れません。

しかし、次回を通り越して、次の次くらいにはちよつと見せ場があるかもしれません。（あ、でも、自分は何分考察が好きなものですから、実際にはもう少し掛かるかもしれません）

それだけを頼みにされると哀しいものがありますが、自分に文才が無いのは事実なので、頑張りたいと思います。（まあ、戦闘描写とかがうまいのかと聞かれたら首を捻りますが）

それでは。

## 第十九話 小休止（前書き）

執筆の都合上省略していますが、裕介は優衣に世界の地形説明をある程度はしています。そこら辺をご了承の上でお読みください。ま、特に意味はないですけどね。

あ、あと、第五話『能力詳細』で書かれた裕介の補助能力、【硬化】は無しにしました。

いろいろ考えた結果、「これは無しにしよう」という事になりました。（何たって、“停止”と全く関係ない能力でしたしね）

どうも、自分の作品は矛盾と言いますか、そういうのが多いみたいです。

あまりそういう風にはならないよう努力いたしますので生暖かい目で見守ってください。

## 第十九話 小休止

「ここが、？水源？エリア——」

俺達は敵と遭遇する事無く、無事に？水源？エリアへと辿り着く事が出来た。

単純に考えれば、各エリアに最低でも一人は落とされた計算となるので、ここまで敵と会わずに來れたのは運以外の何ものでもなかった。

そして、ここへ辿り着いた優衣の反応はというと——

「——すごい」

優衣はほうと息を吐き、その光景に魅入っている。

それもそうだろう。

目の前には？森？エリアほどではないにしろ木が立ち並び、吹き抜ける風は涼風、おまけに側を流れる小川の音は、耳に心地よい響きを与えてくれている。

「どうだ、気に入ってもらえたか？」

俺がそう問いかけると、優衣は目を輝かせながらこちらに振り返った。

「うん。こんなに綺麗な場所、元の世界じゃ中々無いよ」



「そうか」

言い終えると、小鳥のさえずりさえ聞こえてきそうな風景に目を戻す優衣。

しかし、実際にはさえずりなんて聞こえはしない。

そもそも、この世界にはどうやら俺達しか動物はいないようで——  
——当然鳥もいなく——だからさえずりなんて聞こえはしないのだが、この風景にはそんな現実を吹き飛ばすほどの威力がある。

「さて、楽しんでいる所悪いが、俺達の目的を忘れていないだろうな」

俺がそう問うと、優衣は惜しむような表情を見せた後こちらに向き直った。

「うん、分かってるよ。他の人達を探すんだよね」

「そうだ。ここま？海？エリアで来る途中では出会わなかったが、このエリアにも他の能力者がいる可能性がある。俺達の目的は、敵に見つからずに情報を手に入れることに他ならない。だから、ここから先は十分注意していくぞ」

「分かったけど、一つ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「このエリアは危険度が高いって言ってたけど、なんで？」

「ああ、その事か」

俺は一拍置いて、説明に入った。

「この世界には、まともに水が飲める場所はここしかないんだ。確かに？森？エリアに自生している果物にも水分が含まれてはいたけど、あれでは足りない。実際に食べてみて、何か違和感を感じなかったか？」

「確かに、あんまり水っぱさがなかったかな」

「そうだ。だからこそ、このエリアには人が沢山出入りする可能性がある。そんな場所で無警戒に歩いていたら襲ってくれと言ってるようなもんだ」

俺の説明に優衣はうんうんと頷いていたが、疑問を感じたのか、質問を続けてきた。

「でもさ、参加者達全員に食料が入った袋を渡されたでしょ。だったら今はまだそこまで警戒しなくてもいいんじゃないかな。それに、ここに参加者がいるとも限らないんだし」

「確かにな。でも、渡された食料だって、もって5日分だ。この世界について把握していない参加者達は、まず食料の節約をしながらこの世界を探索する。そんな時にこんな場所を見つけたらどうする？先ず間違いないここに居座るだろう。そして、このエリアに落とされた参加者は絶対一人はいるはずなんだ。だから、警戒するに越した事は無い」

「へえ、なるほど」

優衣は納得したのか、今度は淀みなくうんうんと頷いている。

「分かったか。」

「——でもまあ、確かにここはいい場所だ。拠点にするつもりはないけど、ゆっくりはするつもりだ」

一応、優衣のためにもフォローを入れておく。すると、優衣は少し照れた風に言ってきた。

「ありがとう、裕介君」

「気にするな。取り合えず喉も渴いてるから水を飲もうか」

「うん、そうだね」

そうして、二人で小川の水を手で掬い、口へと運ぶ。

すると、優衣は感嘆したように声を出した。

「うわあ、すごいおいしい」

「そうか。でもまあ、そこらの水道水よりは美味しいんだろうな」

俺は味については少し疎いので、よく分からないのだが、優衣はこの水を気に入ったようだった。

「————一応補足しておく、俺だって飲み比べれば味の違いは分かるつもりだ。だけど、比べる対象である水道水がないから分か

らないというだけだ。そこら辺、誤解しないように。

「さて、休憩も済ませたことだし、そろそろ再開するぞ」

「うん、そうだね」

俺は立ち上がり、優衣に手を差し出すと、優衣は俺の手を握って立ち上がった。

「敵に見つからないためにも、周囲に気を配りながらの探索だ。最初からこんな調子だと体力的にも精神的にも辛いだろうからちよくちよく休憩は取るつもりだ。だから――」

――頑張ってくれ、と続けようとした所で、ソレは起こった。

ズウウウン！！

「――ッ！！？」

「裕介君、これって！？」

優衣は突然の地響きに驚きながらも、冷静に俺の判断を待っていた。

――どうやら、優衣の中での俺は作戦参謀といった立ち位置のようだ。

「ああ、近くで戦いが起こっている可能性が高い。

――これは、思ってもみなかった好機だ」  
チャンス

俺達の今回の作戦は、敵の調査にある。

なので、参加者同士の戦いともなれば、一気に二人。5人中3人と、参加者の過半数の能力を知る事が出来る。

しかも、この戦いでどちらかがどちらかを倒せば、参加者が一人減り、更に戦いによって疲弊してくれていればそれを討つ。

俺達に得はあっても損はない好条件だ。これを逃す手はない。

ズウウン!!

俺が思考していると、先程と同じ地響きが同じ方向から来た。

「行くぞ。ここまで派手にやっているんだ。おそらく、戦っているやつらの能力も相当だろう。ここで能力を知っておくに越した事はない」

「うん！」

—————そうして、俺達は地響きがあつた場所へと足を速めた。

## 第十九話 小休止（後書き）

こんにちは、アオです。

次回、裕介たちは戦いませんが戦闘描写を入れる予定です。

前回に裕介たちが活躍する的な事を言っておきながら戦うのは他かよ！というツツコミは無しの方向で。

あ、あと、大分先になりますが、視点切り替えがちよくちよくあるかもしれないという事を今伝えておきます。

まあ、これは頭の片隅に置いていても全く問題はありません。

あと、ついでにエリアの分布を書いておこうと思います。携帯でもちゃんと見えるように工夫はしてあります。が、見えづらかったらすいません。

？平原？

？海？？民家？？森？

？水源？      ？砂漠？

→こんな感じですかね。

それでは。

## 第二十話 最悪の展開（前書き）

今回、物語が急展開を迎えます。

あと、いつになるか分かりませんが、前書きを書かない事態が発生するかもしれません。

これは、物語の都合上、雰囲気上、前書きを書かない方がいいと判断した場合です。

なので、これを楽しみにしている人は（ま、そんな人は少ないでしょうが）ご了承ください。

## 第二十話 最悪の展開

「これは――」

震源まで辿り着いた裕介たちは、その光景を見て絶句した。

――ある所には、隕石が落ちたかのような窪みがある。

――ある所には、何か重いものを引きずったかのような跡がある。

――ある場所の地面は、その部分だけが切り取られたかのように何もない。

――ある場所を中心に、生えている木はへし折れている。

そして、そんな爆心地のような場所に、二人の人物が立っていた。

この光景はどう見てもおかしかった。

そう、そこにいる二人の人物以外何もないのだ。

これだけの惨状、重機でも使わない限り作り出す事は不可能だろう。

しかし、一人は手に小石を持ち、一人は無手で対峙しているだけ。

二人はどちらも男性だが、どうすればあのような装備で、この惨状を作り出す事ができるのだろうか。

普通の感性を持つ者ならば、或いは科学者のような人には、この惨



状を生み出す原因の予測がつかないだろう。

しかし、この世界に集められた人間ヒトは普通ではない。

皆、何かしらの能力を与えられている。

それは、裕介たちとて例外ではない。

なので、裕介たちもこれが能力によるものだとは理解出来た。

理解は出来た、が、しかしそれまでだった。

一体何の能力を与えられればこうなるのか、それが分からない。

現状、裕介と普通の人の違いは、この惨状の原因を理解できているか否か——ただ、それだけだった。

少しすると、二人の人物が動き出した。

一人が手に持っている小石を相手に向かって投擲する。

普段ならば多少の脅威であろうソレも、この場を作り出した者においては何れも兇戯に等しい。

しかし、変化は突然起こった。

「巨大化！」  
ジャイアント

投擲された小石は突然大きくなり、一秒も掛からずに岩とも呼べる大きさとなった。

巨岩と化したソレは、真っ直ぐ前に向かっていく。

対峙する相手は無手。それではあの攻撃は防げない。

しかし、相手の方にも変化があった。

いや、相手に変化では語弊がある。

正確にはその周り、その人物を中心とした地面に変化が起こった。

「―――アースハンド第三の手」

突然地面が盛り上がったかと思うと、それは人の手の形をとった。

手の形をした土は、その人物を守るかのように巨岩を防ぐ。

それだけ。そう、たったこれだけの出来事で、見ていただだけの裕介たちは戦慄を覚えた。

―――あれは、違う。

何が違うのか、その答えが裕介の頭に出ない。

いや、元々答えは出ている。ただ、裕介はその答えに目を背けているだけだった。

そうしている間にも、二人の戦いは続いている。

殆どが先の攻防と一緒にのだが、時折小石を上に向けてはそれが巨

大化し、相手を襲うというのがあった。

その攻撃を受け止める事はせず、ただ回避に専念する。

回避し切れそうになかったものだけを、手の形をしたもので軌道を逸らしている。

この二人の能力は明白だ。

小石を投擲している方の能力は“巨大化”ジャイアント。

物を巨大化させるだけの、シンプルな能力。

そしてもう一人は“第三の手”アースハンド”

土などを手の形に変形させ、操る能力。

その二人の戦いは、巨大化させるほうが攻撃をし、手を操る方が守る、という構図が出来上がっている。

事ここに至って、漸くトウヤ裕介は自らの答えを認めた。

裕介の出した答え、二人の攻防の何が違うかというと――

即ち、二人は全く手加減をしていないのだ。

戦いなのだから手加減をしないのが普通だ。しかし、これは普通ではない。

あの二人の能力は、いや、この世界にいる殆どの能力者たちは人を

殺す事など容易いのだ。

そんな、人を死に至らしめるなど容易な能力を、惜しげもなく使い、戦っている二人。

それが、裕介が違うと思ったことだった。

裕介は、いや、優衣もまた、この戦いの事を深く理解していなかった。

そう、これは、一種の戦争。

人の命など、簡単に消し飛ぶ。

二人はこの光景を見てやっと、これが戦争だという事を実感させられた。

神が最初に言っていた。

——お前には戦場に行つて勝ち残ってもらう——その言葉が、漸く裕介の中に溶け込んだ。

優衣が最初に言っていた。

——戦いに負けた人の精神は、肉体に戻されて今までの生活に戻る——その意味を、裕介は理解した。

これは、ある種のリミッター外しだ。

能力を全力で使えば、ソレは人が死ぬ威力を内包している。

故に、全力を出し切る事は出来ない。

しかし、相手を殺しても問題ない、事後処理がなされると分かっていたらどうだろうか。

答えは簡単。

相手を殺しても自己を正当化出来るのならば、全知全能を以ってして、相手を殺す。

——現代のドラマやアニメなどの作品では、簡単に人が死ぬ。

それにより、今の人間は死に対して頓着が無いのである。

寧ろ、自分も人を殺してみたいと思っている人間がいてもおかしくない。

そういった人間達が繰り広げる戦いは、残虐かつ冷酷である。

裕介が隣にいる優衣を見ると、優衣もまた、言葉を失っていた。

寧ろ、目に涙を溜めてすらいる。

今まで裕介たちが接してきた普通とは、明らかに違ったこの状況。

そうして数刻の攻防が過ぎ、更なる絶望が裕介たちを襲う。

それはたった、そう、ただの一言だけであった。

突然攻防が止んだかと思うと、手を操る能力者が相手に話しかけた。

「なあ、もうそろそろ無駄な争いはよさないか」

いきなり喋りだしたかと思うと、そんな事を言い出す相手に、巨大化の能力を持つ能力者は怪訝に思う。

が、しかし、その話の振り方に興味を持ったのか、話に応じた。

「一体何の事だ？」

話しかけた方は、答えが返ってきたことに満足したように続ける。

「何、ここまで派手に戦っているんだ。他の連中が駆けつけてくるかもしれない。いや、もしかしたら、もう駆けつけていてさっきの戦いを見られている可能性だってある」

その言葉に、裕介と優衣はびくりと震えた。

「そしてもしそうだった場合、このままいくと、残った方は満身創痍。そこを襲われたら碌な抵抗が出来ないだろうな」

「——確かにな」

くつくつと笑う事によって同意を示し、先を促す男。

「そこでだ、一つ提案がある——」

その提案は、裕介たちを愕然とさせるに相応しいものだった。

「――同盟を、組まないか？」

## 第二十話 最悪の展開（後書き）

こんにちは、アオです。

今回はちよつと新しめの書き方に挑戦してみました。

実はこういう文章は結構好きです。でも、今回ので疲れました。もう書きたくない。読む専門でいきたい・・・。

そして、今話で物語は新たな展開を迎えました。

この戦いの本質は、基本殺し合いになります。

極力ソフトな書き方にしますが、そういうのが苦手な方はご遠慮ください。

今まで、「戦いにしては空気が温くないか？」と思っていた読者の皆様、ご安心を。今までののは所謂プロローグみたいなものです。「プロローグはもうあるじゃん」っていうツツコミは断固受け付けません。こっからが本番です。

それでは。



## 第二十一話 最凶の同盟（前書き）

最近忙しく、更新が遅くなっていました。

今回は、前半部分は他者視点、後半部分は裕介視点となります。  
前回みたく三人称視点一辺倒というわけではございません。

## 第二十一話 最凶の同盟

「同盟、だと——？」

俺が持ちかけた提案に、眉を顰める巨大化の能力者。

「同盟なんて組んで、それで一体俺に何の得がある？」

「分からないか？さっきも言ったように、ここでこれ以上の戦いは不毛だ。そして、この戦いを勝ち残る率を上げるには同盟を組むのが一番だ。

——そら、お前に利はあるだろう」

「俺が言っているのはそういう事じゃあない」

「ふむ、では一体どういう事だ？」

相手の言いたい事は分かるが、ここで俺はあえて、相手に自分を無知に見せる。

「確かに、お前がいれば勝率は上がるだろう。だけどだ、俺は信用できないやつに背中を預けるほど酔狂なやつじゃない。俺が眠っている間にお前が俺を襲わない保証は何処にある？」

「何だ、そんな事か——」

俺は、それがどうしたと言わんばかりに息を吐いた。

「だったら、昼間だけの同盟関係でいいだろう。夜はお互い別々に

行動する。

「——これでいいか？」

俺の出した提案に考え込む相手。

先程のように少し頭を悪く見せれば、こちらの提案を呑む確率は高くなる。しかし、自分は相手より頭が回る事も——少なくとも作戦を立てられる程度には——アピールする。

頭が回りすぎると警戒されるが、適当に回れば、それは相手の信頼を得ることが出来る。

そして、数分、相手は悩んだ末に結論を出した。

「——分かった、お前と組もう」

「——よし！」

俺は内心で喝采を上げながら、表面上は平静を取り繕った。

「それじゃあ今更だが自己紹介をしようか。俺の名前は手繰<sup>てぐりしゅうへい</sup>修平——お前は？」

「俺は、おおいしあきら大石亮だ」

「そうか、よろしくな大石」

形式上、握手を求めてそれに相手も応じる。

お互いに相手のことは何一つ信頼してはいないが、これは同盟を組

んだという上っ面だけの挨拶。

お互いがお互いを利用し合おうとしているのは明白だ。

———だが、最後に笑うのは俺だ。

先程のやり取りの中で、お前が俺に頭で劣っているのは既に知れた。

お前はそれでも俺をどうにか出来ると思ったようだが、それは間違いだ。

そしてさっきの戦い、お前は能力を見せすぎた。

俺の能力もこの先、必要に迫られたら全てを披露せざるをえないが、それでもまだ俺の優位は揺るがない。

———さて、取り合えず今やるべき事は一つかな。

「じゃあ大石、同盟を組んだわけだし、先ず最初にやりたい事があるんだが、いいか？」

「何だ？」

「ああ、さっき言っただろ。『他の連中が駆けつけてくるかもしれない。いや、もしかしたら、もう駆けつけていてさっきの戦いを見られている可能性だってある』と———」

「なるほど、つまりは———」

大石も気付いたようで、口角が吊りあがっている。

「ああ、先ず最初に——いけない鼠を駆除しようか」

その言葉を言い終わると同時に、俺は能力を発動させる。

「——第三の手」  
アースハンド

俺は大石を巻き込まないよう——俺はお前を攻撃するつもりはないという意を込めて——周りを一掃する。

美しい景観も、今ではすっかり過去形となった。

大石も俺に続くように、小石を巨大化させて破壊している。

——それから一分もしないで、俺達は破壊をやめた。

「——最初からいなかったのか、それとも逃げ足が速いのか」

俺がそう呟くと、大石は肩を竦めた。

「さあな、だけど取り合えずはここを離れよう。流石に目立ちすぎだ」

俺は大石の提案に頷きを返してその場を後にした。

【side—裕介】

「——同盟を、組まないか？」

その言葉が発せられた後、俺は凍りついた。

———嘘だろ、このタイミングで？

突然の提案に当然眉を顰める巨大化の能力者。

しかし、最初こそ疑問に思ったが、この提案が受け入れられる可能性は高かった。

———先ず第一に、手アイツを操る能力者は他の人間、第三者が来る可能性を提示した。

そしてその相手と鉢合わせになってしまった時、バトルロワイヤルで戦うよりタッグで戦った方が何倍もいい。例えそれが、つい先程まで自らを倒そうとしていた敵だとしてもだ。

———そして次に、俺達がいる可能性、つまりは偵察者がいる可能性を示した。

その場合、それ以上の戦いは二人にとって百害あって一利なしだ。

それに、戦って一人が残ったとしても、さっき手アイツを操る能力者が言ったように、残った方は満身創痍だ。もしかしたら、魔力も無くなってるかもしれない。

つまり、以上の事からこれ以上の戦いはほぼ確実ナンセンスにない。

そしてそうなった場合、二人はその場を離れたいが、お互い背中を見せたくない。

よって、この同盟の話を吞めば、二人は安全且つこれから先を生き残れる可能性が大いに上がるのだ。

俺がそんな事を考えている間に二人の会話は続いていく。

そして、数分間の沈黙があった後、俺は絶望的な一言を聞く事になった。

「――分かった、お前と組もう」

――やはり、組んでしまったか。

俺は内心舌打ち、これからどうするかを考えた。

あいつらと戦うなら、二人いるときに仕掛けるのは愚策だ。

だから、必然的に夜。それぞれが別行動を取った時に限られる。

しかし、それは直ぐにはやらない方がいいだろう。

あいつらがいれば、他の参加者達が消える可能性が大にあるのだから。

そもそもとして、優衣の能力は補給が利かないからあまり無意味な戦いはしたくない。

――それと、優衣みたいな女の子にはあまり戦いなんて経験させたくない。

まあ、こんな事を面と向かって言うのはは恥ずかしいし、何より、

本人が異論を唱えそうだから絶対に言わないが。

と、そんな事を考えてると、二人は自己紹介を終えたようだった。

どうやら巨大化の能力を持つ方は大石亮、おいしあきら手を操る能力者は手繰修平てぐりしゅうへいと言うらしい。

二人はお互いに握手を交わし、傍目には関係良好そうに見えるもないが、俺にはあの二人がお互いに付け込もうとしているのが分かった。

————能力は脅威だが、信頼関係はまるで無い。付け入るならここかな。

と、俺が二人を倒すプランを練っていると、突然、手繰が悪寒の走る笑みを浮かべた。

「じゃあ大石、同盟を組んだわけだし、先ず最初にやりたい事があるんだが、いいか？」

「何だ？」

「ああ、さっき言っただろ。『他の連中が駆けつけてくるかもしれない。いや、もしかしたら、もう駆けつけていてさっきの戦いを見られている可能性だってある』と——」

————なっ!!?!? まずい!

俺は手繰が何を言いたいのかを理解し、そして大石も理解したようだった。



「ああ、先ず最初に――いけな鼠を駆除しようか」

これから起こるであろう事態の予測は容易につく。

俺は優衣の手を握って走り出した。

「裕介君!？」

「逃げるぞ!このまま此処にいちゃ危険だ!」

俺達が走り出すのと同時に、背後から破壊音が聞こえてくる。

俺達とあいつらとの距離は20m程しかなかったので、このままじっとしていたら直ぐアレに巻き込まれてしまう。

俺は脇目も振らず、一心不乱にその場を走り去った。

## 第二十一話 最凶の同盟（後書き）

こんにちは、アオです。

この後もう一話投稿すれば、この章は終わりとなります。

しかし、もう一話投稿と言いましても皆さんが期待しているようなものではなく、所謂、設定集みたいなものです。

次章からはそれなりに本格的な戦闘があるかもです。

あと、皆様に伝えとかなければいけない事が。

前回の後書きにて「これからが本番」だとか、「主人公は汚い手を使う」だとか書きましたが、若干の語弊が・・・。

あの言い方だと、これからずっと戦いっぱなしと思われたでしょうが、別にそういう事はありません。

時にはちゃんと休憩もします。

この事で自分が言いたいののは、次章からは確かに戦いは激しくなっていくけど、戦いばっかじゃないよという事です。

紛らわしい書き方をしてしまいましたでした。

評価・感想などお待ちしております。

それでは。

## 能力者レポート（前書き）

これは所謂設定集と言いますか、キャラクター紹介と言いますか、とにかくそんな感じですよ。

一応、これは裕介が参加者の詳細をレポートに纏めたという設定です。なので書き方にも裕介の主観などが入っています。なので、ここに書かれている能力についての考察はあくまで裕介の分析です。あと一応書いときますと、裕介は実際にはレポートなんて書いてません。あくまで“そういうもの”という認識でお願いします。

## 能力者レポート

残り参加者…7人 既知…4人（自分を除く）

参加者プロフィール

名前…進藤優衣  
しんとう ゆい

性別…女

年齢…17歳

外見…身長は160cm近くと、この年齢の一般身長からすれば高め。髪の毛は黒くて癖が無く、背中の肩甲骨よりちよつと下まで伸ばされている。実は地味に胸が大きく、着やせするタイプを見た。

能力名…切り札  
トランプ

能力…各絵柄にはそれぞれ固有の能力があり、それを駆使する。  
シート

能力値には数字によって差があり、上から

A<K<Q<J<10<9<8<7<6<5<4<3<2と  
なっている。

スピード…騎士は戦場にて散る  
ファイア

トランプを爆発させる能力。4つの絵柄<sup>シート</sup>中、攻撃の役割を持つ。

ダイヤ…魔<sup>ペンタクル</sup>を払いし護符

トランプが盾の形状を取り、攻撃を防ぐ能力。4つの絵柄<sup>シート</sup>中、防御の役割を持つ。

但し、防げる値は限定数値でそれ以上の攻撃を受けると、数字分だけ能力を減衰させた後、霧散する。

ハート…傷<sup>ヒール</sup>を癒す聖なる光

トランプから光が発せられ、傷を治したい部位に当てて傷を治す能力。4つの絵柄<sup>シート</sup>中、回復の役割を持つ。

傷は基本的に体の内側から治るが、優衣が操れば表面から治す事も可能。但し、これもダイヤと同じく、治せる範囲が限定数値である。

補助能力…数値化

自分が視認したものの能力値を数値化する能力。  
これにより、相手の能力の強さに応じたカードを選出する。

考察…おそらく今回の戦いにおいて最優の能力。しかし、能力が消耗品なため連戦には向かない。

名前…炎道焰<sup>えんどうほむら</sup>

性別…男

年齢…？歳（推定16，7歳。おそらく俺と年はそう変わらない）

外見…一般平均より若干太っている体躯。将来は中肉中背の有望株。身長は160ちょい位で優衣より少し高め。体力はそれほど無さそう。

能力名…発火能力  
パイロキネシス

能力…炎の一本道  
フレイムロード

自分が視認した箇所へ炎を疾らせる能力。

補助能力；不明

考察…見た目通りの愚鈍な動き。俺が優衣を抱えて走ってもまだ余裕があった。能力は危険だが、その他のスペックはそれほど気にしなくてもいい。

対応策…背後からの奇襲による攻撃。正面切って戦うには相性が悪いので、一撃で倒さなくてはならない。

名前…手繰修平  
てぐりしゅうへい

性別…男

年齢…？歳（推定16，7歳。おそらく俺と年はそう変わらない）

外見…長身な体躯（大体180cmくらい）にすらりと伸びた長い脚、そして整った顔立ちと所謂イケメン。男としてコイツは気に入らない。時折見せる歯の煌めきを見ると無性にムカつく。歯あ全部折ったるか？

能力名…第三の手  
アースハンド

能力…自分の周りの地面を手の形に変え、操る能力。その豪腕が放つ一撃は、一瞬で周りを一掃するほど。

補助能力…不明

考察…顔もよく、身のこなしもよく、能力もいい。そして頭まで回るというチート参加者。大石とは同盟関係にあるが、関係はそこまでするしくない様子。

対応策…同盟関係は昼間だけらしいので、夜一人になってからの奇襲攻撃。能力上、手の動きはそれほど速くないので、少しの間だけなら一対一での戦闘も可能。

名前…大石亮  
おおいしあきら

性別…男

年齢…？歳（推定16，7歳。おそらく俺と年はそう変わらない）

外見…髪の毛は短く、おそらくは坊主頭から伸ばし始めたと思われる。身長は170中盤くらいで、体つきもしっかりしている。石の投げ方を見るに、おそらく元野球部。（元と付くのは、頭が坊主ではない事が理由に挙がる）

能力名…巨大化  
ジャイアント

能力…物を巨大化させるだけのシンプルな能力。戦闘スタイルは、いくつか持っている小石を相手に向かって投げつけ、それを巨大化させるというもの。

補助能力…不明

考察…能力はとてもシンプルだが、元野球部という事も相まって、対策が難しい。小石を投げる速度がとても速いので、回避が難しく、手繰も防御に専念せざるをえなかった。手繰とは同盟関係にあるが、関係はそこまでよろしくない様子。

対応策…同盟関係は昼間だけらしいので、夜一人になってからの奇襲攻撃。そして、戦う場所は障害物が多い場所がいいので、？森？エリアか？水源？エリアで戦うのがいいと考える。また、巨大化させたものは質量も上がるので、それを狙うことも出来る。



## 能力者レポート（後書き）

今回のようなものは、これから各章が終わる時に纏めとして載せようと思います。

あと、今回は参加者だけでしたが、他にも書くつもりです。

今章はこれで終わり、次からは次章に入ります。

・・・が、まだ次章のタイトルが決まってません。すいません、何かいっつもこんなんで・・・。

なので、前回同様タイトルは“未定”とし、決まり次第、変更させていただきます。

あと、もう一つご報告が――

これから自分、暫くの間更新を休止します。

多分ですが、次回の投稿は12/15（木）辺りになります。（例えば変更があったとしても、投稿が早くなるだけです。遅くはなりません・・・何も無ければ）

詳しい内容については、活動報告にて書きますので、そこら辺もつと詳しくといった方はお読みください。

というかですね、いい加減後書きがいつも長いんだよと思っている方も多そうなので、今度からは重要な話とかは活動報告に書きたいと思います。

一時休止などの報告は一応後書きでさらっと書きますが、詳しい事はあっちで、みたいな感じです。

何か更新が停滞してるなあ、と感じたりした場合、そっちを見ていただけたら謎が解消するかもです。

訂正 12/10（土）↓12/15（木）

評価・感想などお待ちしております。  
それでは。

## 第二十二話 決意（前書き）

こんにちは、そしてお久しぶりです。アオです。

長い休載期間を終えて、漸く再開致しました。

そして、未だにタイトルが決まっておりません：orz タイトルの方は、予定通り？未定？とさせていただきます。つくづく思うんですが、自分はこんなんで大丈夫なんですかねえ。

そして突然ですが、皆様に哀しいお知らせが。

な、何と、今回は皆様がとても心待ちにしていたであろう（笑）後書きがありません！

理由の方は、読んでみれば分かります。分かんなかった人も、次回の後書きだとかでお教えします。

## 第二十二話 決意

？水源？エリアから走ること十数分、俺達は？民家？エリアに辿り着いた。

「はあ——、はあ——、——ここまで来れば大丈夫かな？」

優衣が乱れた呼吸を整えながら、俺に質問をしてくる。

「あいつらは振り切れただろうけど、このエリアには誰かがいる可能性が大いにあるな」

「そっか、ここが裕介君が言ってた——」

「ああ、？民家？エリアだ」

？民家？エリアとはその名の通り民家が立ち並んでいるエリアだ。

建っている家は全部日本家屋なので（偏見かもしれないが）廃れた村のような雰囲気はしなくもない。

取り合えず、休憩を必要としている俺達は手近にある民家へと入っていった。

「当然だけど、誰もいないね」

家に入ると優衣がそんな事を言ってきた。

「そりゃな。寧ろ誰かがいたらまずいだろ」

俺も優衣もそこまで魔力は消費していないが、体力の方はそれなりに消費している。（一応俺はまだ大丈夫だが、優衣が辛そうにしている）

なので、ここらでじっくりと休憩したいというのが本音である。

今日は起きてからずっと動き通しだったので、体力的にも、そして精神的にも結構来ていた。

ここらで一つ、ゆっくりと休憩するのもいいだろう。初日から根を詰めすぎだ。

「でも、このエリアには誰がいるんでしょ？ だったら危ないんじゃないかな？」

「確かに。でも、黙って静かにしてれば多分大丈夫だ。このエリアには50近くの家が建ってるわけだし」

「そ、そんなにあるんだ」

正確な数は分からないが、ざっと見た感じではそれくらいはあった。本当はちゃんとした数を数えたかったのだけど、流石に時間がなかったので4大まかな数しか分からないが、それで十分だと思う。

「でもまあ、ここに転移されたヤツが一軒一軒探してないとも限らないし、注意しておくに越した事はないだろうな」

そう言って俺は出口の方へ歩を進めると、後ろから優衣が当然の反応を示してきた。

「どこいくの？」

「見張りー」

そう言って手をぷらぷらと振って家を出ようとするが、またも優衣声に止められた。

「待ってよ。見張りとか、ちゃんと説明して」

俺はふうと溜息を吐いて優衣へと振り返った。

「優衣、お前少し休め。今日はずっと動きっぱなしだったからまだ一時間ちよつと位しか経ってないけど疲れてるだろ。休んだ方がいい」

俺は息継ぎもせずまくし立てるように優衣へ言った。

そして優衣の反応はというと、俺の予想を全く裏切らなかった。

「そんな、私は大丈夫だよ」

優衣は、口ではそう言っているが、顔には疲労がありありと見て取れた。

「いいから休め。休憩って言っても別に寝ろとは言っていない。

——まあ、眠いんならそれでも構わないけど。

とにかくだ、肝心な所で疲れてへばられたらこっちが迷惑だ」

「・・・」

・・・

——裕介君には、私が疲れてるように見えるの？」

自分では分からないのか、そんな事を聞いてくる。

「ああ、見える。

体力的にも、精神的にも、な——」

俺がそう言うのと、優衣は諦めたように肩をすくめた。

「分かった。じゃあお言葉に甘えさせてもらって少し休むよ」

「そうしたほうがいい」

これで終わりだとばかりに背を向けようとする、優衣が声を掛け  
てきた。

「但し、一つ条件があるよ」

「——条件？」

「うん。

——休むのはいいけど、裕介君も休んで」

「それじゃあ敵に襲われた時にどうするんだよ？」

「大丈夫だよ。幸い、この家の窓からでも外は見えるし、他の人が  
来ても多分気付けると思う。それに、まだ戦いは始まったばかりだ  
から家を壊して回る、なんて事もないと思う。それに——」

優衣は一旦そこで言葉を切り、こちらを見つめてくる。そしてその瞳は、どこかこちらを挑発するような色だった。

「それに、裕介君はこんな場所に女の子を一人置いておくの？ 寂しいな。心細いな。私、普通の女の子なのに、いきなりこんな戦いに身を投げ出されて、凄く寂しくて心細いから誰かが一緒に居てくれないと泣いちゃうかも」

「ぐっ」

「————コイツ、俺の意図に気付いてたのか!？」

優衣のような普通の女の子が、————心構えはしても————戦場に出れば直ぐに体力と精神力を消費するだろうと思ひ提案した事なのだが、まさか優衣がそれに気付いていたとは。

気付かれた驚きとかよりも、俺の紳士な心配りを察知された事による羞恥の方が強かった。なので、必然的に優衣に対する反応も<sup>負</sup>ぶつきらぼうになる。

「フン、泣くのは構わないけどな————それだと他の参加者に気付かれるかもしれないからな。一緒に居てやるよ」

プイと、優衣を見ていた視線外しながら言うと、優衣が微かに笑ったような気配がした。

「うん、そうだね。それじゃあお願い」

そう、————腰を若干低くし————上目遣いに言ってきて、俺はやれやれと肩を竦めながら素直になれずに家の奥へと戻った。



優衣は窓の外がよく見える場所に陣取ると、そこに腰を下ろした。

「ほら、雄介君も座ってよ」

俺も優衣に促されるまま近くに腰を下ろす。(近くといっても若干の間がある)

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

そうして何分経ったのだろうか、数分だけかもしれないし、十分以上そうしていたかもしれない。もしかしたら一時間こうしていたか

もしれない。そんな時間が過ぎ、俺は回りにそれなりの注意を払っている、優衣が突然話しかけてきた。

「ねえ裕介君、ちょっといいかな」

「何だ」

俺の声はそっけなく、多少突き放したような感じだった。

「もう、さっきの事、まだ怒ってるの？あやまるから機嫌直してよ」

「別に――」

別に、返事がそっけなかったのはそういう理由からじゃなかった。ただ、こういう雰囲気慣れておらず、どういう返事を返せばいいのか分からなかっただけ。

そして優衣は、俺の言葉にそう、と呟いた後また話しかけてきた。

「だったら裕介君、ちょっとこっちに来て」

そう言って優衣は自分の隣をぽんぽんと叩く。

俺はそれの真意を探っていたが、再度優衣が叩いて催促し、特に（気恥ずかしい事以外）断る理由もないのでそれに従った。

「うん、それで裕介君はあっち側を向いて――うん、そう。それで――」

近くに寄った後も優衣からの指示があり、それに従っていると俺達

は背中合わせになっていた。

「一体どうしたんだよ？」

背中合わせになった後、また沈黙があったので堪らず俺は質問をした。

「うん、あのね——」

そう言った後、優衣は俺に体重をかけてくる。

そして背中越しなのでよく分からないが、その体勢で俺に半分ほど向き直った。

「？」

「そのまま。そのままでもいいよ」

俺を制止した後、優衣は小声で、しかしちゃんと俺に聞こえるような声で話しかけてきた。

「ねえ、裕介君——」

「何だ」

「——ありがとう」

「何がだ？」

「さっきの裕介君の心配りの事だよ」

「ああ、その事か——」

——だったら気にするな、と続けようとしたが、優衣の言葉にそれを遮られた。

「大丈夫。私は、大丈夫だから」

それは自分に言い聞かせるような、そんな響きを持っていたので俺は聞き返した。

「何がだ」

「自分でやるって決めた事だもん。私は大丈夫——」

しかし、優衣の言葉は俺の問いの答えとしては不相应なものしか返ってこない。

「おい、ゆ——」

「だから、私は泣いたりなんかしない。

——自分でやるって、そう決めたんだもん」

それは、その言葉は、さっきの事に対する答えだろうか。それとも

——

「裕介君は、優しいね」

そう言って、背中に感じる仄かな温もり。それは、湿り気を帯びていた。

「――俺は、優しくないよ」

だって、現に今、こうしてお前を■かせてしまっている。

そうして感じる背中への重み。それは、俺に全てを委ねた、安心しきった重みだった。

「せめて、夢の中では幸せにな」

そして――

「誓おう――俺は、お前を守ってみせる」

相手に対してではなく、自分に対して誓う。

言葉に出したのは自分へ浸透させ、その思いをより強くするためだ。

――相手の顔は背中合わせで見えず、ましてや相手は寝ているがしかし――その顔は、微かに笑ったような気がした。

## 第二十三話 悪夢（前書き）

今回は優衣視点での話となります。

第四話の前書きでも説明しましたが、◇が並んでいるのが時間経過、  
ゝが並んでいるのは回想を表しています。

あと、最後の方の文章が携帯の方だと読みにくいかもしれません。  
その事をご了承ください。

## 第二十三話 悪夢

「・・・い」

声が聞こえる。誰の声だろう。知らない声。だけど、私を安心させる声。

「・・・お・・・い」

私が揺れる。世界が揺れる。この揺れは、手放した意識を取り戻そうとする。

「・・・ゆい・・・おい・・・おき・・・」

段々と、意識が浮上してくる。暗い暗い闇の中へ沈んだものが、引き上げられるような感覚。

「・・・おい・・・ゆ・・・きろ・・・」

ユサユサと、リズムよく揺らされる私の体。さっきからこの調子だったのだろう。このリズムを体感しているという事は即ち、私の意識が引き上げられる時。

「おい・・・優衣、起きろ」

揺さぶりが少し激しくなる。それと同時に——私の意識が覚醒した。

~~~~~

—————夢を見ていた。

それは、一般的には悪夢と呼ばれるものだろう。

悪夢とは、自分が恐怖を感じる悪い夢。

そして私は、その夢に恐怖している。

だったらそれは、悪夢と呼んでもいいはずだ。

夢の内容はこの世界に来る前、能力の練習をしていた世界でずっと見ていたのと同じもの。

—————私が、死ぬ夢。

正確には、私が死にそうになった夢だけど。

でも、いつもいつもその夢は私の死の間際を映す。

死の間際、いつもそこで私の意識が浮上する。

だけど今回は勝手が違った。

—————今回の夢には、続きがあった。

ほんの少し、私の死の間際よりほんの少し先の時間。

だけどいつもと違うというのは、喜びと同時に恐怖を感じる。

私もその例に漏れず、安堵といった感情と、恐怖を感じた。

夢の中の私。

死ぬ間際。死のほんの数秒前。

私は、その時何を感じたのだろうか。

恐怖。悲しみ。驚き。困惑。覚悟。観念。嫌悪。憎悪。怒り。

どれもそうであって、どれも違う気がする。

それでも、ただ一つだけ確かな事。

この中には無い。本当に間際に思った事はきっと――懇願。

そして私は、夢の中で暖かななにかに包まれた。

その時の私は、何とも言えない安堵感に包まれた。

本当ならそれで終わり。

だって、最初に言ったとおり、感じる感情は喜びと恐怖。

そのどちらも感じたのだから、もう何も感じないと思うのはオカシイだろうか？

だけど私は悪夢を見た。

夢だというのに創造主には厳しく、私は最後に一つ、いや、より正確に言うならば安堵の直後、刹那にも満たない時間で私の感情はあ一つのものに塗り替えられた。

悪夢には必要不可欠な要素、恐怖に――

~~~~~

ガバッ

私は勢いよく目覚めて周囲を確認。

私は今、裕介君の言う所の？民家？エリアにいる。

周りは板張りの床で、壁も板が張ってある所謂日本家屋だ。

そこまで確認した所で、私はある一人の人物に目が止まる。

その人は、いきなり起きた私を驚いた表情で見ている。そしてその顔は、私がこの世界、この戦いで一番最初に見た顔で、今現在一番頼りになる人の顔。

その顔を見ると、何故だか胸が苦しくなる。

締め付けられるような感覚。しかし、恋慕の情というわけじゃない。

私の顔を心配そうに覗き込んでくるその瞳の色は優しく、私はそれ

しか知らない。

その人に感じている感情は、信頼。

だけど今回は違い、とてつもない恐怖に駆られる。

そして――

――気付いたら

――恐怖を振り払うように

――思い切り

――強く

――抱きしめていた

## 第二十三話 悪夢（後書き）

こんにちは、アオです。

この小説を書き始めてはや3ヶ月が経ちました。時が過ぎるのは速いものですね…。

——と、ちょっとたそがれてみたり。

今年も残す所あと僅か。今年中に、あと1〜2回更新する予定です。

あと、ちょっとばかり宣伝をば。

簡潔に申しますと、先日投稿した短編、『ティッシュの苦悩』を是非読んでね☆ という事です。

・・・すいません、調子乗りました。

あと、自分がもう一つ書いてる小説、『天使の仕事』も、もうそろそろ投稿していききたいと思ってます。

いくら自分が書いてるからって他の自作を宣伝するとか・・・。

何かいい区切りが見えないので、ここらで終わりにします。

それでは。

## 第二十四話 恥ずかしい…（前書き）

ハッピークリスマス！

今日はクリスマスという事もあり、内容は若干ピンク色です。（実際は関係ありませんが）

文章中、うまく表現し切れなかった部分があると思いますのでご了承を。

今回は前半の視点が優衣、後半が裕介となっております。

——尚、章タイトルの問題は解決しました。ご迷惑をお掛けしてすみませんでした。

## 第二十四話 恥ずかしい…

——恥ずかしい。

私は今、いまだかつて無いほどのピンチに陥っている。

——お、男の子に、いくら夢見が悪かったといってもいきなり抱きついちゃったあ・・・。

遡ること5分前、飛び起きた裕介君に抱きついた後、私は恥ずかしさの余り沈黙。結果、いたたまれない空気が流れている。

——どうしよう、裕介君の顔、まともに見られないよう・・・。

裕介君は裕介君でさっきからボートとしてる。さっきの事が原因なのは明白なので、私からはどうしても話しかけることは出来ない。

——今絶対顔真っ赤になってるだろうなあ。どうしようどうしようどうしよう。

抱きついた後、直ぐに自分が何をしたのかを理解、瞬時に離れて事情の説明はした。

だけど、もう一度ちゃんと説明した方がいいんだろうからしたいんだけど、恥ずかしくて声を掛けられない。

他にも、声を掛けられない理由がもう一つある。

——寝顔、見られちゃっただろうなあ。

私は普段、自分がどのような顔をして寝ているのかを知らない。（当然といえば当然だけど）

なので、そんな自分でもよく分からない顔を人に、それも男の子に見られたとなると凄く羞恥心が沸いてくる。

——ああ、恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい

他にも色々な要素が絡まった結果、今こうして私は羞恥で顔を伏せて沈黙している。

だけど、いつまでもこうしてはいられない。

私は今までの人生の中でもトップクラスの勇気を振り絞って裕介君に話しかけてみた。

「あっ、あの、裕介きゅ——」

「えっ——」

「——」

「——」

・・・再び流れる沈黙。

——うわああん！声裏返ってたし、挙句に噛んじゃったよお！

まさかあの場面でこうなるとは思っていなかったので、私はもうど

うする事も出来なかった。

と、私が伏せていると今度は裕介君から話しかけてきた。

「あー、その、優衣？俺は別に気にしてないから、その・・・お前も気にしないでいいぞ」

「う、うん・・・」

——気、遣われちゃったなあ。

その事を感じたのは自分に対する怒りか、はたまた他の何かかは分からない。

でも、私は決心を付ける事が出来た。

「うん、分かった。ごめんね」

「いや、別に気にしないでいいから」

よし、ここは気合入れていこうかな。裕介君には色々と迷惑掛けちゃってるから挽回しないと！

そう自分に気合を入れて、よしっと立ち上がる。

裕介君も私が立ち上がるのと同時に立ち上がった。

「——それで裕介君、これからどうするの？」



【side—裕介】

「・・・」

「・・・」

俺は今、よく分からない状態に瀕している。

チラリとこちらの様子を窺っては直ぐに顔を伏せる女の子と、それを見つめている男の子。

傍から見れば甘酸っぱい光景だろうが、現実はそのままで甘くない。

俺は突然の事に追いつけないで安心して、優衣は恥ずかしさの余り顔を伏せる。

そんな奇妙な空気が、ここには流れていた。

事の発端はこうだ。

~~~~~

優衣が寝始めて2時間ほど、その間優衣は俺に背中を預けたまま寝ていて、俺も勝手に女の子の寝顔を見るという無粋な事はしないでそのままの体勢でいた。

そしていきなり優衣がうなされたので、俺は優衣を起こす事を試みる。

何とか起こす事に成功したものの、優衣は起きた瞬間にいきなり俺に抱きついてきた。

その後数秒ほどして、優衣は我に返ったのか、慌てて俺から距離をとる。

そしていきなり抱きついた事に対する弁明をした後、真っ赤になった顔を伏せた。

しかしその後もチラリとこちらを窺っては慌てて顔を伏せての繰り返し。

そして現在に至る。

~~~~~

回想終了。

優衣は相変わらずだ。

と思ったら何か深呼吸してる。これは・・・来るな。

「あつ、あの、裕介きゅ——」

「えっ——」

「——」

「――」

・・・再び訪れる沈黙。

優衣のほうを見ると、やはりというか、顔を真っ赤にしていた。

ま、そりゃそうだよな。

何たって、声が緊張で上ずった挙句、途中で嚙んじやったわけだし。

・・・というかヤバイ。地味に萌える。

優衣はというと、さっきので全力を使い切ってしまったのか、今は多少放心している。

というわけで、俺から話しかける事にした。

「あー、その、優衣？俺は別に気にしてないから、その・・・お前も気にしないでいいぞ」

「う、うん・・・」

・・・ミスった。

気を取り戻してやるはずが、こちらの意図がバレバレで逆に落ち込んでる。

くそう。俺もこういうの慣れてないんだよ。

と思った矢先、優衣のほうから話しかけてきた。

「うん、分かった。ごめんね」

「いや、別に気にしないでいいから」

いきなりの言葉に反射で返してしまったが、どうやら優衣の中で決心がついたみたいだった。

優衣は決意の籠もった顔で立ち上がったので、俺もそれに習って立ち上がる。

「――それで裕介君、これからどうするの？」

## 第二十四話 恥ずかしい…（後書き）

自分にはうまい心理描写が書けないのか・・・！？  
とか思ってる今日この頃です。

もしかしたら今年中にあと一話投稿するかもしれません。

それでは。

## 第二十五話 拠点（前書き）

書き終わることに成功したものの、何だか内容が釈然としません。具体的はどう、というのが分からないので取り合えず投稿します。誤字脱字などがありましたらご報告していただけると嬉しいです。

## 第二十五話 拠点

俺たちは今、？民家？エリアを抜けて？海？エリアにいる。

優衣からの問いかけに対し、俺は一先ず拠点を築こうという意見を挙げたので、優衣もそれに同意した結果ここにいる。

元々このエリアを拠点にしようと思っていたので、決まっただけからの行動は早かった。

？民家？エリアからここまで来る途中、誰とも会わずにここまで辿り着いた。

そして？海？エリアに着いた頃、優衣が感じていたのであろう疑問をぶつけてきた。

「裕介君さ、？森？エリアは分かるけど、どうして？海？エリアなの？」

「ああ、確かに？森？エリアにはこれ見よがしに果実が生ってるかな」

「・・・それ、嫌味？」

「うんにゃ、ただ事実を言ったただけだよ」

俺が笑いながらそう答えると、優衣は頬を膨らませた。

「ふん、いいよーだ。説明の間お間抜けにも寝てる人に言われたっ

て痛くも痒くもないし」

「それだったら、大切な支給物を失くしたお前も言えないんじゃないか？」

「・・・うー」

痛いところを突かれた優衣が恨めしそうな視線を送ってくるが、俺はそれを華麗にスルーした。

「もう、そんな意地悪言わないでさっさと教えてよっ」

俺が言った事は全部事実なので言い返すことが出来ないのか、逆切れ気味に言ってきた。

とはいえ、俺が？海？エリアを推す理由か――

「別に言ってもいいけど、ちょっとクイズ形式にしようか」

「えー、普通に教えてよ」

当然のように不平が飛んでくるが俺は気にしない。

「いいから。軽い脳トレだと思ってやってみなって」

「うーん、分かったよ・・・」

その代わり、ヒント頂戴」

「分かった。じゃあ1つ目のヒントだけど、この世界の海って普通の世界の海と殆ど同じなんだよ」



俺がヒントを出すと、優衣がいきなり頭を捻った。

「うーん。そのヒント、抽象的じゃない？」

「ヒントなんだからそうに決まってるだろ。直接的な表現を持つて  
るヒントなんてもはやそれは答えでしかないぞ」

「そりゃそうだけどさ」

「いいから、当てずっぽうでも言ってみなっ」

うーんと頭を悩ませる事数分、優衣は違ってるだろうけどといった  
風に答えた。

「しょっぱい、とか？」

「いや、それ何の利点になるんだよ」

「ほら、生きるのに塩分って必要でしょ？」

確かに優衣の言い分もそうだけど、流石にこの答えは酷い。

「不正解」

「うーん、じゃあ2つ目をお願い」

「お前、考える気ある？」

「あるよ。あるから2つ目をお願い」

「はあ、まあいいけどさ。じゃあ大ヒント

——優衣がさっき言ってた？森？エリアを推す理由と一緒」

「え、それって——」

そう言って黙り込む優衣。俺はそれをただ黙ってみていた。

「え、と。もしかして——魚でもいるの？」

「ピンポン。大正解」

「え、うそ!？」

「・・・答えを言った本人が何驚いてるんだよ」

「だって、本当にそうだとは思わなくて・・・」

「ま、確かにそうだな」

何せここは異世界だ。俺たち以外の動物がいるとは誰も思わないだろう。だからそこを狙う。

「ところで優衣。？森？エリアには果実、食料が普通に生っている。なのになんで俺は？森？エリアを拠点にしようって言ったと思う？」

「え、だってそれは食料があるから——」

「それは他のやつらにも言えるだろう。あれだけこれ見よがしに生っているんだ。誰かがいてもおかしくない」

「うーん、確かにそうだね」

優衣が考え始めるが、長くなりそうなので答えを言う事にする。

「正解はな、身を隠せるからだ。身を隠せるから拠点にしようと考えられるんだ。

——なら？海？エリアは？」

海エリアには、テトラポット（よく海にある三角の形をした石）のような物がなく、あるのは申し訳程度にある岩だけだ。

当然、身を隠す事はできない。

ならどうしてかというところ——

「ここにはな、食料が、魚がいるからだ」

「え、でもそれって——」

？森？エリアにも、と言いかけた所で優衣がはっとした。

「気付いたか。そう、？海？エリアには優衣が思ったように魚がいるなんて思わないだろう。それに、食料は支給されてるし、？森？エリアにも果実が生っていていいカモフラージュとなっている」

「そっか、魚がいるなんて知らなければ、わざわざこんな所を拠点に使用なんて思わないもんね」

「そういう事。？森？エリアと違ってここは身を隠せる場所も無い。

だけどそれが上手い事機能してるんだよ」

「そっか——」

優衣が納得したような声を上げる。

俺が優衣に質問をしたのもこの為だった。

ただ口で、ここは何も無いから安全と言っても駄目で、相手に理解してもらいながら説明をした方がこれからのことにも役立つ。

と、俺が内心で「計画通り」と思っていると、思考に耽っていた優衣がこちらを向いてきた。

「うん、裕介君の考えは分かったよ。それで、ここを拠点にするのは分かったけどこれから場所探し？」

「ま、そんな所かな」

そうして俺と優衣で拠点によさそうな場所を探すため、一旦別々に行動した。

俺は練習期間は基本的に？森？エリアと？民家？エリアで寝泊りをしていたため、？海？エリアにはそれほど詳しくは無い。

魚がいることに気付けたのもただの偶然からだった。



30分ほど、気がつけばもうそろそろ集合の時刻に近づきつつあった。(俺も優衣も腕時計を身に着けていたので時間に関しての約束は問題なかった)

俺はそれほどの収穫が無い事に、あとで優衣に何を言われるかなどと思いながら戻っていると、約束の場所には既に優衣がいた。

その顔は心なしか嬉しそうで、どうやらいい場所を見つけたみたいだ。

俺は優衣に駆け寄ろうとして、気付く。

優衣から20mほど後方には、先程逃げる事に成功した相手――――炎道が立っていた。

## 第二十五話 拠点（後書き）

こんにちは、アオです。

今年はこれで最後の投稿となります。

本当はこういう終わり方で時間を空けたくないんですが、こればかりは・・・

そしてお気付きかもしれませんが、次回は戦闘に入ります。

自分としても戦闘描写を書くのは嫌いではないんですが、つつい説明文を書き加えて気付けばこんな量に・・・なんて事も多々あるのでご了承を。

次回の投稿は1月1日の元日にやりたいと思っているので、ちょっと暇な時間ができた時にでもどうぞ。

では皆様、また来年にお会いしましょう。  
それでは。

## 第二十六話 再戦（前書き）

新年明けましておめでとうございます。

今年も『超微妙能力で戦場を駆け抜ける！』を宜しくお願いします。

## 第二十六話 再戦

「優衣、伏せろ——！！！」

俺が必死になって叫ぶと、優衣もこちらの異変を感じたのか、言うとおりに伏せてくれた。

間一髪。炎は優衣の頭上を通り抜ける。——が、炎道は炎を操り優衣へもう一度攻撃しようとする。

——させるかよ！

優衣が壁となって見えなかったが、今は優衣が伏せているお陰で炎がよく見える。

俺はすぐさま能力を発動させた。

「——視覚操作、制限」  
オペレーション リミット

視界には炎しか映らなくなる。

「物体停止——」  
フリーズ

——前回、俺の能力はアイツの能力に負けた。それは、能力の強さがアイツに劣っていたからだ。

——だが、今回は違う。

籠める魔力をいつもより多くする——



ディールト  
「――強化」

炎を――止める!!

「う、らああああ!!」

多量の魔力を籠めて能力を発動させると、炎の動きは止まり、その隙を逃さず指示を送る。

「優衣、こっちだ!」

「うん!」

俺は視覚操作を解除し（能力さえ発動していれば後は魔力を籠めるだけでいい）、炎を止める力を緩めずに相手を見据える。

「裕介君、これって――」

「敵だよ。相手は分かってるだろうけど、炎道だ」

「やっぱり――」

優衣がこちらに来たので、能力を解除。すると、炎もまた消えた。

「よお。後ろから不意打ちとは、また随分なご挨拶だな」

相手を挑発するため、嫌味ったらしく言う。

しかし、それは大した意味を成さなかった。

「ふんっ。誰かと一緒になくちゃ戦えない奴に言われたくないな」

炎道がこちらに歩いてくる。

「――優衣」

炎道がこちらに近づいている最中、俺は小声で優衣に話しかける。

「炎道<sup>アイツ</sup>と真っ向勝負は分が悪い。一気に片をつけるぞ」

「――分かった」

こちらの意図が伝わったのか、僅かに頷く優衣。後は優衣のアドリブに任せるとしよう。

俺は背負っていた荷物を後ろに放り投げた。

そして双方の距離が縮まっていき、15m程の間を空けて対峙した。

「どうした。今度は逃げないのか？」

「いやね。お前程度の相手に逃げているのが馬鹿らしくなってな。いつまでもストーカーされても困るし、ここで片をつけようか」

俺がそう言い終わり、俺は半身をずらす。――合図。

優衣はすぐさまトランプを相手に投擲する。

トランプは炎道に近づき、あとは能力を発動させるだけ。当然、優

衣もそうしようとする。しかし――

「騎士<sup>フア</sup>は――」

「炎<sup>フレイム</sup>の一本道<sup>ロード</sup>」

炎道が能力を発動。同時に炎が疾り、トランプへと伸び、そして――

「うそ――」

優衣が信じられないといった顔をする。

俺も予想外だった。

まさか、能力を発動する前に燃やし尽くされるなんて――

こんな芸当、即席で出来るわけが無い。

そして俺はある可能性に思い至る。

「お前、まさか――」

俺が聞くと、炎道は上機嫌に答えた。

「そうだ。お前達に逃げられた後、ずっと対策を練っていたんだ。なあ、停止<sup>ストップ</sup>の能力者さん」

――なんてことだ。

俺は内心、舌打ちをする。

まさかここまでの対策を練られていたとは思わなかった。

いや、そもそも、あの時俺たちが逃げた後、ずっと俺たちだけの対策を練っていたというのは予想外だった。

俺たちが敵情視察をしていたように、あいつもそれと似た何かをしているものとはばかり思っていた。

これは全くの誤算。しかし、手が無いわけではない。

「優衣、今何番を使った？」

「その、7番——」

「よし、それじゃあ次は——」

俺は簡単に新しい作戦を伝える。

優衣はそれに頷いたのを確認した後、炎道を見る。————と、

「うわっ」

目の前に炎が迫っていたのでそれを危うく回避。しかし、炎は操られているので攻撃はまだ続く。

「——チツ、物体停止<sup>フリーズ</sup>」

先程と同じように（ただし、視界を制限している暇は無い）炎を止

める。だが――

「甘いんだよ！」

炎が3つに分かれ、同時に襲ってくる。

「ぐっ、解除、再構築――空間停止」  
キャンセル リ・コンストラクト フリーズ

目の前の空間を停止し、それによって出来た時間で距離をとる。

しかし俺の能力は直ぐに破られ、稼げた時は一瞬。またもや俺に迫ってくるがしかし――

「魔を払いし護符！」  
ペンタクル

――その一瞬があれば十分だった。

優衣が盾を展開し、俺への攻撃を防ぐ。  
ダイヤ

すると、炎道の声が聞こえてきた。

「はっ、便利な能力だな！見た限り、お前の能力はトランプの柄によって違うんだろ？」

くそっ。こちらの情報がどんどん洩れていく。

このまま逃げたらまたアイツに考える時間を与えてしまう。ここで倒さねえと――

「優衣、やれっ」

炎道の攻撃は止まっているので、その隙を逃さず先程の作戦を実行する。

「うん！」

優衣はトランプを投擲する。

「くそっ。―――フレイム炎の」

炎道は先程と同じく優衣のトランプを発動前に燃やそうとする。しかし、トランプ向かう先は―――

サクッ

「―――おいおい、どうしたよ？ここでまさかの凡ミスか？」

トランプは地面に刺さり、それを見た炎道が愉快気に笑う。

それは当然だろう。攻撃が来ると思っていたらそれは不発に終わり、自分の優位は続いている。しかし、それこそが狙い目―――

「ファイア騎士は戦場にて散る！」

―――地面に突き刺さったトランプが爆発する。

ここは？海？エリア。当然地面は砂だ。つまり―――

「うわっ」

爆発により砂が吹き飛び、それが目くらましとなって炎道の視界を塞ぐ。

俺はその隙を逃さずに炎道に接近。

炎道は砂が目に入ったのか、こちらには気付いていない。

俺は炎道の後ろに回り、クリスタルを外すべく手を伸ばした――

## 第二十六話 再戦（後書き）

明けましておめでとうございます、アオです。

戦闘描写とは、かくも難しいものですね：

ちよいとばかり説明口調な感じが否めない文章ですが、これからも宜しく願います。



## 第二十七話 勘違い（前書き）

1月1日から今日まで、一体どれだけのものを食しただろうか…。  
1月1日から今日まで、一体どれだけの間寝ていたのだろうか…。  
1月1日から今日まで、一体体重は何キロ増加したのだろうか…。  
1月1日から今日まで、そんな感じに正月を満喫していました…。

話は変わりますが、今回はちょっとだけ残酷描写があります。出来る限り押さえた表現をしましたが、そういうのが苦手な方はご遠慮、若しくは覚悟してください。

## 第二十七話 勘違い

——勝った。

炎道の背後に回り、クリスタルに手を伸ばした所で俺はそう確信した。

炎道は今、爆発によって巻き上げられた砂で視界を潰されている。

それは即ち、アイツの能力が使えなくなるという事。

能力が使えず、しかも背後からの奇襲には反応できるはずが無い。

そう——思っていた。

しかし、実感させられた。

俺の考えは全て常識の範疇に収まっている。

そしてこの戦いは、常識なんて、そんな生温いものは意味を成さない。

俺が手を伸ばして確信したのは、自身の揺るぎない勝利。

そして、おそらく炎道が感じていたのも俺と同じもの。

相反する二つの同じ思いは、衝突する運命にある。

そして結果は——俺の敗北だった。

炎道のクリスタルまであと十センチ。そこで俺の腕に異常が起きた。  
俺の腕が——燃えていた。

赤く、紅く、朱く、アカクアカクアカクアカク——！！！！

「う———がああああ！！！！」

俺の絶叫が響き渡る。

すぐさま腕を引っ込め、体ごと大きく後ろに跳び引いたが、腕に奔った痛み<sup>炎</sup>だけはついて来た。

何も考えず、本能に任せて跳び引いたので着地も何も無かったのだが、それが幸いした。

俺は海に背中から跳びこむ形になり、受身も取れずに転んだが、それのお陰で腕の燃烧が止まった。

そして腕を見ると、ソレは燦燦たる状態だった。

燃えたのは肘関節の辺りだけだったのだが、その辺りは赤黒く焼け焦げている。

そして今も尚煙を上げ続けるソレは、たんぱく質が燃えるときに出る不快臭を放っている。

どれだけ魔力を籠めたのだろうか、一瞬しか触れていないにも関わ

らずこの有様だ。

ここまで詳しく見えてしまうのなら、まだ燃えていた方がマシだと思えるほどに酷かった。

「裕介君!!」

優衣が急いでこちらに駆けつけようとするが、それを阻む影が。

「これから先は行き止まりだぜ」

炎道だ。こちらからはよく見えないが、きっとニヤついているのだろう。そんな感じの声だ。

「どいて——」

「あ?」

「どいてよ!!」

優衣は炎道にカードを投擲するが、能力を発動する前に燃やし尽くされてしまう。

形成は、明らかに炎道の優勢だった。

しかし、そんな絶望的な状態であるにも関わらず、俺の頭はクリアになっていく。

普通なら痛みで悶えるはずであろうその火傷も、脳がストッパーをかけているのか、最初ほど痛みは無かった。

俺は自分の状態を確認して立ち上がる。

俺が立ち上がると、優衣は二枚目のカードを投げようとしている所だった。

「裕介君！」

「おい、炎道——」

優衣の言葉を敢えて無視し、炎道に話しかける。

炎道は俺が立ち上がった事に驚きを感じたのか、驚きの表情ですぐさまこちらを振り向いてくる。

「これは——お礼だ!!」

無事な方の手（左手）で掴んでいた砂を炎道に撒く。

この手は二度目だが、炎道に余裕が無かったのと、振り向き様のカウンターを狙ったので容易に上手くいった。

俺は炎道の横を通り抜けて、優衣の方へ一直線にひた走る。

そして優衣の許へ辿り着くと、優衣は直ぐに心配の声を上げた。

「裕介君！大丈夫!？」

そう言った直後、俺の腕の惨状を見て息に詰まるが今は時間が惜しい。

「優衣、直ぐに直してくれ。番号はハートの10だ」

「え、10？」

「——ううん、分かった」

優衣が一瞬訳の分からない表情をする。

それは当然だろう。何故なら、この腕の火傷にそこまでの数字は要らない。精々6か7で完治できるだろう。

しかし、優衣はそんな疑問も直ぐに封じて俺の言うとおりにカードの準備をする。

「裕介君、それじゃあ腕を——」

出してと続けようとした所で俺が止める。

「いや、このまま全身を頼む」

「・・・うん、分かった。

——傷を癒す聖なる光<sup>ヒール</sup>」

優衣が能力を発動。と同時に背中に痛みが奔った。

「ぐ、ううう」

「裕介君!？」

「いや、このまま続けてくれ!」

これまでの間に視力を取り戻した炎道がこちらに攻撃してくるのも予想の範囲。寧ろ、この攻撃すらも計算に入っている。

回復を受けながら炎を躲す。そして躲しきれないものがあってもそれを優衣の能力が治す。

そうして5秒間、少なくとも今までの人生で一番長い5秒間が過ぎ、俺の傷が完治し終わった。

しかし、傷は治ったが、攻撃が終わったわけじゃない。

炎がこちらに迫ってくるが、優衣がまた盾を展開した。

「魔を払いし護符！」  
ペンタクル

盾が炎道の攻撃を防ぐ。――が、攻撃はそれで終わらなかった。

「嘘、回り込んできた!?!」

「くそっ、やっぱりな

――優衣!」

俺は優衣の手を引き走ってその場を離れる。

間一髪。炎は俺たちがいた地点の足元に向かっていった。

「え、何で――?」

優衣が不思議そうに炎を見る。

それは当然だろう。先程までまるで生き物のように動き、更には盾を回り込んできたのだから。

しかし、さっきので確証が得られた。

炎道、アイツの能力は――

「炎を自在に操る。それがお前の能力だろ」

俺は多少離れた位置にいる炎道に話しかける。

「え、それって――裕介君、最初にそう言ってなかった？」

優衣が疑問の声を上げてこちらに講義してきたのですぐさま炎道を確信。炎道は攻撃をしてこなさそうだったので最低限の注意を払いながら説明を続ける。

「俺は、お前の能力は視界に映る場所に炎を疾らせるものだと考えていた。だけど、それは違った――」

ここで俺は一旦言葉を切って相手を見つめる。そして俺の答えを言い放った。

「これは俺の推測だが、お前の能力は魔力を燃料とした発火だ。さっきの炎のバリアも、予め周囲に魔力を張り巡らせて、そして発火させたものだろう」

「え、だけどそれでも裕介君が最初に立てた予想と変わらないんじゃないの？」



「いや、大きな違いがある。今まであいつの能力は視界に映るという条件があると仮定していた。しかし、実際はそんなものは関係なくて、魔力を操れば視界の外でも炎を発生させられる。つまり、死角からの奇襲が効かないんだ。さっきの優衣の盾を炎が回り込んできたのもそうだ。視界という制限が無いから魔力を操って盾の後ろに炎を疾らせる事も可能ってわけだ」

俺がそう言い終わると、炎道は驚いた表情となった。

「——驚いたな、正解だよ」

炎道は本当に驚いた表情をしている。どうやら、今の言葉に偽りは無いらしい。

「自分で言っておいてアレだが、いいのか？そんな事を言って」

「ハッ。別に、本当に正解なんだから言っても大丈夫じゃねえか。それに——」

炎道が口元を吊り上げる。

俺は危険を感じてすぐさま優衣を抱えて後方にバックした。

瞬間、俺たちが元いた場所に炎が疾っていた。

「お前達には魔力が見えないんだ。別に、言っても大した問題は無いだろう？」

立て続けに炎が発生する。

そのどれもが炎道を起点として発生しているため、おそらく炎は炎道から疾るのだろう。

しかし――

「くそっ。数が多い・・・！」

そう。問題は数の多さだった。炎自体が動くスピードはまだ何とかなるレベルだが、疾る速度についてはもう殆どお手上げ状態だ。

炎道の能力を分かりやすく言うと、炎道は先ず最初に魔力というガソリンを撒く。

そしてそのガソリンに炎を疾らせるといった感じだ。

流石にガソリンほど炎が疾る速度は速くないが、それでも普通の人間にとっては十分すぎるほどの速度だ。

ところどころに火傷を負いながらも回避を続けるが、俺たちが今いる場所はアイツの射程内。

多分、もっと魔力の道を増やせるだろう。

そんな状態は絶対に避けたいので炎道から離れようとするが、炎道自身、炎を操りながらも少しは動けるらしいのでそこまで差が開けないでいる。

――くそ。炎道、<sup>アイツ</sup>どんだけ処理能力あんだよ！

今炎道がやってる事は、推測に過ぎないが、両手で絵を描くのと同じくらい神経を使うものだと思う。

それをやってのけるというのは、将来が大いに期待できる。

と、そんな事を考えていると、炎が腕を掠った。

「――っ、ぐっ！」

「裕介君、大丈夫!？」

優衣が心配そうな声を上げる。

これまでの攻撃は、全て優衣に当たらないようにしているが、もうそろそろ当たってしまうかもしれない。

それまでに、今のこの状況を何とかしなくては――

## 第二十七話 勘違い（後書き）

こんにちは、アオです。

今回、文章を書いてる最中から気になっていたんですが、裕介の喋り方が高校生のソレじゃないと思うんですね。それと、優衣のセリフも「裕介君！」が大半を占めていましたし…。

もうちょっとセリフとかを工夫できないかなと思って試行錯誤してみても失敗。

ならば逆にセリフを少なくしてみようと思い挑戦するも失敗。

文章を最初から書き直すのかと考えた時、ふと、とある考えが降りてきまして、これでいい！これがベストなんじゃ！とか何とかかなりましてこうなりました。

何が言いたいのかと言いますと、わざとこういう文章にしていると言う事です。

！ べ、別に最初から書き直すのが面倒ってわけじゃないんだからねっ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8153w/>

---

超微妙能力で戦場を駆け抜けろ！

2012年1月4日12時19分発行